

証の雑誌

Pensoj flugas trans la land - limon THE SENRYU ZASSHI

麻生路郎☆主宰



六月号

No. 457

senryu

川 雜 本社六月句会

日時 六月七日(月)午後六時
会場 自安寺(「211」一四七八番)

大阪市南区千日前電停スグ東北側

兼題 「慌てる」(三句) 清水白柳選

「慰安」(三句) 西尾 榮選

「株」(三句) 八木摩太郎選

「襟」(三句) 水谷竹莊選

席題 三題(当日発表)

戸田古方

呈賞 各題天位・各題天位から段乃選により不朽洞賞

会費 百五十円

幹事 いさむ・南宗・文秋・庸佑・八郎・与呂志

清人・すすむ・薫風・柳雲子・舟遊・摩天郎

★投句だけの方は郵券五十円同封

(〆切六月五日)

予会社本 7月
兼題〃
気前
スーツケース
蜂
握る

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・大阪 六〇八一

優 艶 / 清 楚 / 奇 技
第 二 回

川 雜 川柳ゆかた会

8月8日(日)午後一時

★恒例の第二回「川雜川柳ゆかた会」は心齋橋のほとり夢の殿堂「大成閣」で華々しく開催される。盛夏の一日を冷房完備の会場で、お気楽にくつろいで、名吟を競っていただきたい。遠来のお方もお誘い合わせの上参列されたい。

日時 8月8日(日)午後一時
会場 大成閣 電話 四五二三八

南区大宝寺中五丁目二六
心齋橋大丸北ノ辻東五〇米北側

司会 吉田圭井堂
開会の辞 若本多久志
挨拶 傍島静馬選

兼題 「女難」(三句) 山川阿茶選

「朗らか」(三句) 河相すすむ選

「歴史」(三句) 辻圭水選

「踏切」(三句) 辻白溪子選

「斗志」(三句) 北川春葉選

★特別課題「眉」(三句)
出席者も各題全部・各題句箋別紙・裏面に
雅号明記七月末日本社着便のこと

席題 当日 三題発表(各題三句)
★特別課題 天位にはトロフィーを贈る

呈賞 ★特別課題 天位にはトロフィーを贈る

★特別課題を除く各題天地位人・各題天位から段乃選により不朽洞賞

余興 奇術 村田瓢太

落語 桂米之助

閉会の辞 本多柳志

会費 二百円

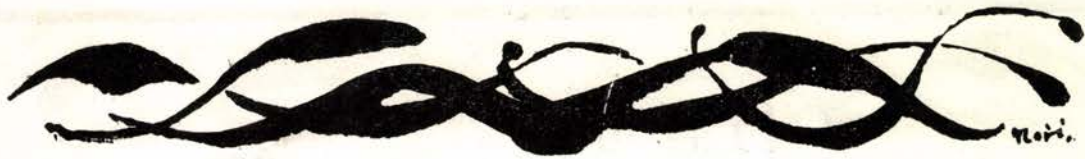
懇親宴 会費八百円(同会場において5時半から7時半までの予定)

★投句だけの方は郵券五十円同封(〆切7月末日)

▼夫人同伴歓迎・初心者歓迎▲

大阪市住吉区万代西5丁目25番地
電・大阪 (671) 6081

川柳雑誌社



川柳塔

麻生路郎選

西宮市 若本多久志

法科出の嫁が来るよな世とはなり

トイレで並びいつまでも冷えまんなア

送られる方も虚礼と知っており

夏もの宣伝桜はまだつぼみ

杯洗はバイ菌だらけつけて差し

女の無愛想輪だなアと思ひ

大阪市 正本水客

足音へ砂丘どこまで従いてくる

すぐばれる嘘で歩巾を合せにき

一〇〇パーセント間違いのない肩たたく

百人に一人の一人になるつもり

まな板の上にも春がきてる色

高槻市 若柳潮花

髪染めて恋の前科はもう時効

思ひ出が美しいからひとり住む

解ひいて追って来そうな人形の瞳

花びらをそのままたむ蛇の目傘

兵庫県 小西無鬼

共産党の親で息子の嫁がなく

八十を杖で高利の集金し

大阪府 西いわを

飼育したとて心まで飼われてず

PTAはずして行こう首飾り

更年期隠しおおせぬ坐り蛸

大阪市 北川春巢

金で買ったとやら名取りを羨ます

▽ 下戸の酔い知ってる唄をみな歌い

内科学会総会出席(東京サンケイホール)

春眠を学会場へ持って来る

会費値上げへ拍手もせにやならず

サラリーマンが走る走る朝の丸の内

ひかり号

ひかり号事業の鬼と乗り合わせ

富士山のあたりビュフェの視察とし

大阪市 後藤梅志

六分咲き確める目に空みどり

寒明けて思う去年の手術前

どうにでもなれと思えばすぐ眠り
銭金ととんだ穢ないものにされ

せがまれた自転車競技用を買ひ

ハワイ 羽佐間柳葉

負けん気も神経戦に草疲れる

ああ無情親子が金で唾み合う

嬉しいわに釣られて財布口を開け

堺市 吉田圭井堂

不渡りを押し戴いた阿呆らしさ

妻の身にいざ鎌倉の多いこと

顔だけは天が才女に味方せず

役僧のお経お茶出すひまもなく

防府市 長野井蛙

一押が押せず不発ですれ違い

これ以上言わせる気かとボスからみ

金貯めて風のおとづれにもおびえ

浴びるほど飲める特級酒値は知らず

岡山県 直原七面山

先妻の手紙に夫あわててい

スモッグへ両手を挙げた科学陣

肩いからせてみてもおいらはコンマ以下

コップ酒女を忘れ去るための

老いてなお子に従わず二号持ち

日曜日の昼寝テレビをかけたまま



オールドミス同士仲よくビール抜き

鳥取市 河村 日満

ハイハイと落第の子のいい行儀

僕どうしたらいいかへ父の義憤感

浪人をするかへふつと首を垂れ

満開へ給料引きの折で飲み

倉敷市 木村 千容

信仰に近い医長に迎えられ

身近から昨日も今日も入院す

女房にリードされとる敷かれとる

倉敷市 田垣 方大

奥さんが坐り冗談びたとやめ

女性から信用されて淋しがり

老妻とお湯につかれば話題なし

お布施まで聞いとかなんだ妻の留守

加賀市 野村 味平

還暦へピンとは来ない若さなり

これからが一と踏張りの気力見せ

小切手でよいかといやに念を入れ

大阪府 木村 水洞

自殺後も税と借金つきまとい

豊作の損を不作で取り戻し

春闘の台閤台閤にする花見

雑音に感わされずに子を信じ

彦根城四月十五日

まだ咲かぬ桜の下で手をたたき

米子市 小西 雄々

庶民また天声人語へ共鳴し

賃上げのときは闘志をみなぎらせ

金溜めることを偉業として暮し

不景気へ巷も鰻戸おろす店

大阪市 山川 阿茶

旅と言うゆるみに不惑ひっかかり

一塊の石父母いわははと思うやこそ

腰痛の医者へお灸をすすめに来

加賀市 那谷 光郎

けだものに似たくらしして金を貯め

年長なだけでわびしい上座なり

切り抜き帳貼るだけ貼って読みもせず

世話好きがうちでは懐手に困り

伴が好きなら何おか言わん嫁の「アラ」

大阪市 福井 野迷路

落花生つまんで言う嘘考える

なせばなるとは言えなさずにならざりき

大松精神を讀みて
岡山県 浜田 久米雄

世話方になって葬儀のつづけさま

幼稚園入学という孫を撮り

また一人死んだも明治生まれなり

出雲市 尼緑之助

又選挙かいなと思う招待状

カーブム今度は奥様練習所

屋上で春を見おろす患者達

京都市 大鶴 喜由

トンネルにいて希うは光りばかりなり

波立つ胸に聞かさん好いてはならぬ人

今日を語る妻あれば今日は楽しき

盗まれる花と知りつつ移植ゴテ

土一寸めくれれば春を待つ姿
門真市 福島 鉄児

お隣りの不幸を朝になって知り

花びらを踏んで酒席が定まらず

降ると見た当が外れたたみ傘

岡山市 服部 十九平

拾い屋が今日の稼ぎにバナナ買う

にやにやとしたハンサムへ業が煮え

訊問へ素直に答えて拇印押す

生きている砂丘風紋またかわる

息抜きへ女を連れて草被れる

岡山県 田村 藤波

戦死した伴のお金で温泉に浸り

儲けさせてくださる太陽さま昇る

古いぬれば悪貨みたいに扱かわれ

両親はないと大空見て答え

見島市 本田恵二朗

二人三脚近頃妻に曳かれ気味

家庭サービスおいしそうに食べてやり

京都市 松川杜的

レシートをきっちり幹事の時の癖

胸張って歩けぬ性質で出世せず

米倉のお屋根と鳩は知っている

鳥取市 森本法泉子

再就職(四句)

履歴書を横書にする世に変わり

初出勤今朝は拍手の音もよし

瑞雪と思えば雪の道もよし

今朝からはラッシュの中の人となり

堺市 高崎雄声

池田さんの其の後を語る人もなし

としよりの釧のとれたのはわびし

駅名唱呼馴れた客には煩わし

島根県 藤井明朗

妻不在ゴキブリが出る台所

酒追加たのむと覗く台所

倉敷市 野田素身郎

福耳も散髪屋にはじゃまになり

左遷の旅としらず子供は嬉しがり

背の子が泣きだしやっとな腰をあけ

老人会にも派閥があつてボスが居り

芦屋市 丸川初甫

停退へもうふるさとの土を恋い

レットルの悪いのがレットルの批評する

予備知識などと二十才は聞きたがり

旧姓で呼んで旧友嬉しがり

岡山東 池田古心

春春春小鳥も恋のお喋りし

幼稚園にやり心配が増し

大阪府 早川清生

電報がきてアパートの部屋があき

ほやき漫才程度の怒りしかもたず

首相渡米野党の幹部くにへ去る

区役所で市議呼び捨てる要保護者

大阪市 西出一栄

常連の紹介が要る露路の寿司

許されぬ恋の乳首が色変り

古国旗ホロを包んだまま売られ

珍らしい雪へ夜更けの窓をあけ

大阪市 児島与呂志

市財政赤字昇給気がねなり

橋筋の出入の波が不思議なり

私立でもいいよ俺の飲む口へらすから

米子市 石坂新雪

職人の匂い職場の風呂で消し

つめ込のバスで朝めし消化する

のどかとはバスのストした日の事か

メリヤスの裏水ごけの様になり

道路拡張

バラックに住めばよかつたのに気付き

大阪市 西川晃

古本屋眼鏡の奥に何を視る

ガヤガヤツイツイと芸術を褒め

大物らしいどこか抜けてるところがある

岡山市 林葵丘

無表情名医のメスはよく走り

今日あつて明日を思わぬルージュ引く

新育児六畳で赤ん坊泣きつづけ

理論だけで喰えるかと言う俺も貧乏

神戸市 仲どんたく

よたよたとぼろ汽缶車で五輪曳き

新入社唐手初段と言うもあり

春寂寥 僕はシラノ・ド・ベルジュラック

自叙伝に二号のことは省いとき

平田市 久家代仕男



アベックの花見遠出のバスにゆれ

出稼ぎを水田へ戻す春となり

値上げしてぬけぬけお世辞いうて刈り

御用ききバイクの尻を向けて聞き

大阪市 本多柳志

蕾から散るまで賞めてバスガール

社の為と言う美辞麗句に押しきられ

お手盛りのバランスシート社をつぶし

新入社テストされてる茶を運び

人の価値つけて昇給人がする

出る釘は打たれるからとよう言わず

精巧であれば機械は無神経

おでん屋で逢いパチンコで又出合い

岡山市 江国幽谷

鉢植えて育たぬ松が岩で生き

知らぬ人までが挨拶する田舎

銭別に勝る涙で見送られ

西宮市 野呂鶴汀

まばたきもせない我が子の眼を逃れ

コンパクト課長の恋を映し見る

十円で子は一時間程だまり

大阪市 魚住満潮

続・西成界わい

西成に駆落者も住馴れる

駄菓子と並べて息子の遺骨あきらめず

自殺か他殺かパトカー派手に来る

鉢巻をしめて人買い辻に佇ち

遠縁が来て葬式を出して去に

オイチョカブ立膝の女も交り

売食いの鍋釜のこすのみとなり

へべれけに酔いベトコンに拍手

日本晴手錠を持って出る仕事

こんな物でも金になる釜ヶ崎

ねっからの百姓でして外が好き

脱走の意志もしめさず貨車の牛

事もなげにもう生えもせぬ歯を抜かれ

用意した菓そのまま旅を終え

入学期子無しはお祝出すばかり

型どおりコネも入社テスト受け

採用通知もう来る筈の社がつぶれ

上役のあだ名から知る新入社

親切がすぎて本心さぐられる

胸いっぱい言葉には出ぬ初優勝

大阪市 河井庸佑

大阪府 谷沢好祐

工事に汚職物体に影ある如く

泣声は強しお先に診てもらい

コマーシャル癪にさわって覚え込み

お見合いも今はよく食べよく話し

爪に火の金でピアノは見栄ぢゃない

アベックヘフルーツパーラー明るすぎ

妻にするまでは敬語で話しかけ

昇給の椅子のクッションまで弾み

顔の艶こいつがボスとすぐわかり

石仏の頭で煙草もみ消され

エスカレーターガール一日かしまり

今日も叱られ我が輩は平である

人は右側が明治の身につかず

南風女早くも脱ぎたがり

すみれたんほほをなくして家が建ち

セールスマンこそぞと自家用ほめちぎり

訴訟よりやくざがカタを早くつけ

アンブル禁止安楽死に誤算

敬老会フロンと招待状やぶり

大阪市 今西章雅

京都市 室井八九寸

木屋町にお馴染もなどノドへ世辞
湯豆腐の酒過ごさせる雪が舞い

岡山県 横山 一声

伊予路の旅にて

汽車弁のうまさ伊予路の桃畑

伊予がすり柄だけほめてよう買わず

満開の桜へ雪の山が見え

三十の初婚を世間にうたがわれ

小松市 関戸 宗太郎

伊勢の旅

仏具屋をのぞくゆとりもなく発車

人を見る眼があり鹿もよりつかず

拝観料取って便所は板囲い

石川県 高山 涼髪

春闘の町葉桜になっている

三寒四温どころか彼岸も猛吹雪

少女まだ恋をしらずにつくし摘む

美弥市 安平 次弘道

植林す世界の危機は思うまい

請求書を役所が急す年度末

停年延長有難いよな酷のよな

大阪府 高橋 尚史

結論を酒の匂いでせかされる

法善寺女を連れられない方がよけ

金剛山に登りて

此の径も人が往くらしジュース缶

諫早市 川岡 壺眼子

帰郷した吾が娘を誇る頬かむり

一日たてば判るものを予想屋は

家で拝む阿弥陀さんが古物屋にもあった

布施市 本多 清人

へらず口叩けるコツも小商人

婦人科へぎりぎりまでは行きそびれ

夜桜へ去年は妻を君と呼び

富田林市 浅川 八郎

今日も亦孫にテストしられて居

痒いのは背中胸を掻いたとて

縄張りを犯してここに孫抱く

会吉市 奥谷 弘朗

栄転の春が来た来た花も咲け

改善へ愚痴のたえない台所

兵庫県 遠山 可住

つぼみ固し咲けばもいちど飲めばよし

養老院も彼と彼女でもめていた

ピニールの始末に困る台所

停年の上司へ部下はもう従わず

兵庫縣 河原みのる

春の雪へ終日寝たら尚疲れ

入試発表今日新聞を見るこわさ

葬式の席で合格おめでとう

鳥取県 清水 一保

喰って寝るだけが不足で貧乏し

伸び伸びと育て伸び過ぎ慌てさせ

一杯のつもりでくぐる縄のれん

出雲市 中川 晃男

男ならと親喚かせて娘は育つ

卒業が本職にするアルバイト

松江市 柳楽 鶴丸

闘病の妻死に給う事なかれ

日本髪結っても犬は知っており

京都市 都倉 求女

夜の霧何かを求めたい甘さ

春風踰蕩通勤電車だけ増埒

朝桜酒気もほこりも寄せつけず

杭打ちの工事も春はのんびりと

兵庫縣 大江 秋月

重忠が出たか看護婦の足急し

妻の出たリレー思わず手を叩き

大阪府 松田 半月

春雪に山持ち目の色かえて去に

今治市 越智 一水

母がいて蓬を入れる彼岸餅

反抗期の心ハシカのようなもの

雑草の根性だけは子に教え

竹原市 山内 静水

父の死へ妻とはじめて乗るハイヤー

埋葬へ背中の子を掛け

新居浜市 小林 孝正

子と卓球の妻に少女が残っていた

現行犯まだ間違いと母信じ

嘲笑を背なに生き抜く化粧する

乾杯を一緒にしたい人が来ず

夢は自由飽きずに雲を見ていたり

熊本県 有働 芳仙

泣きなさいとマダムも泣いて注いでくれ

太く短かく生きる信条八十五

倒産の風を忍者の如く縫い

散るさくらこぼれる酒の花筵

大阪市 賀本 昇

ガニ股に構えて座席巾を取り

骨格で男と知れる赤いシャツ

私鉄ストタクシー今が稼ぎ時

手拍子へあとが続かぬ数え唄

枚方市 宮川 珠笑

夜業の灯映えて倒産には遠し

貸間あり長男夫婦別居して

大の字にうちの成長株眠る

京都府 西村 句楽坊

脱皮して玉葱だった自己を知る

諸行無常いずれ死ぬのだ懲捨てろ

守口市 羽原 静歩

「オサイザンス」などとしこたま儲ける気

コレクシヨンのように古い恋文出してみる

同舟近詠

和歌山市 秋月 宏方

十七も八も過去にはあった僕

貨幣価値へそくりも万を越し

セックスと離婚の記事の週刊誌

少年A弟に持ち嫁き遅れ

れんげ菜の花こんな平和な村離れ

今治市 長野 文庫

吹くな降るな茲二三日が花盛り

浪人だのに学生さんと言うてくれ

予備校で聞く裏口の金の嵩

憎しみの盃もうげご米転

恩給が目当て左遷へ腹たてず

みな同じ年頃らしい松並木

大洲市 米沢 曉明

空広しひがんでいたは俺の方

弱いのが基盤をはこぶ昼休み

落選もいささきれいな票ばかり

ホスの眼が金で解決するという

表面は白紙にかえず総辞職

松山市 月原 宵明

二年目の浪人桜うらめしい

何事ぞさくらと言うに鉢巻し

マニキュアにこんな色あり桜貝

奥様の素顔が御用きき叱り

集団就職一人が泣けばみんな泣き

白バイが花見の群を縫うてゆく

女には惜しい女で苦労する

パーマ屋で旦那のあらを披露する

丹前を土産屋宿の名で招き

名古屋市長谷川 鮮山

往復はがき梨のつぶてに又終り

よし飲んでやると度胸を据える猪口

のがれたい今年も役を持ち込まれ

足を組む大胆さ眼をそむけ



川傍柳初篇研究 (二七)

丸十府 高須啞三味
岡田甫 前田喜代人
清博重義
川端柳風 藤井和雄

322 髻切で判た跡薄みどり

鼠弓

川端II髻切とは、源氏重代の宝刀髻切丸で、義泉が生捕十人の首と同時に髻まで切られたので、そう名付けられた。

「薄みどり」も源氏の宝刀で、義経が腰越から追い返され、再び上洛する途中、頼朝との仲を和らげ給えと祈願して、箱根権現に奉納したという宝刀である。それを感さんの眉を剃ったあとの表現を洒落て言ったのであろう。

高須II嫁の眉剃りの句に間違いなし。
前田II贊。なかなかこった句で、嫌味である。

丸II礎稿贊。但し「平家物語」劍巻には、義家でなく、満仲となっている。義家に伝えられた時は、鬼丸と改名してあった。

岡田II諸説に尽く。

四月十五日開

(19ウ)

323 客人、式人、生酔と歌

眠狐

川端II宴席の描写——下戸は早く席を立ち、歌の出る時は、座も乱れ酔いも廻っている。

高須II礎解かとも思うが、生酔いと共に百人おいて逃げ(柳籠三)という句があるので、正月のカルタ遊びの席へ、生酔いが飛び込んだので、一人にげ二人にげて、結局あとには当の生酔いと、カルタ札だけが残った、というではないか。

前田II宴席に贊。生酔がにげ、また歌の順が廻って来る前に逃げるというところ。
岡崎II高須説贊。「歌」は歌カルタすなわち百人一首である。

清II「説と歌」という諺がある。説は説カルタ、歌は歌カルタを指すが、似ているように微妙な相違があるというところである。この「説と歌」にかけて「生酔と歌」とした句であらう。

藤井II歌を「歌の順番」とは苦しい。やは

り歌カルタと考えるべきであらう。

丸II高須説贊。

岡田II同。

324 三味線を屏風の外へほからかし

秋紅

川端II「三味線」は転び芸者の三味線。「屏風」は杜屏風。「ほからかし」は放り出しの意であるから、いよいよ本番となつて、不要になった三味線を屏風の外へ放り出した、という句である。

高須II「ほからかし」には「ほうり出し」た意と「不関心におく」意とあり、もう用のない三味などは、屏風の外におきっぱなしという句、もちろん芸者の転びである。
清II三味線なんか、最初からほうり出してある。

藤井II不要になって三味線をほうり出したとも、初めからほうりだしてあったともとれるが、句の形の上からは、前者と思う。もちろん踊子の転びにちがいない。

丸II礎解贊。

岡田II同。踊子。(今の芸者)の句。
325 思案して娘かんざし返す也

眠狐

川端II手に取って眺め、髪にさした所をほめられ、欲しいとは思いが値段が少し高いと、元の陳列場所に返す。しかし、何となく惜しい。そういう若い娘の心理を詠んだ句と思う。

高須II買おうとして止めたのではなく、町内の若者のプレゼントを返したのである。「思案して」だから、貰うことは一度もなかったのだが、よく考えてから、一応返したのである。柳雨翁は、ただ「上分別」とだけ言っている。

前田II「思案して」にふくみがある。かんざしをもらえば、いうことを聞かねばならぬし、おしいけれど、考えたあげく返した。魚心あれば水心といった風なものが、句のうらに感じられる。

藤井IIかんざしは、好いた娘に贈る最適な品だから、高須・前田説は動かぬ所。この娘はたしかに「上分別」であった。算盤をしっかりと胸中に納めている。

丸II高須説以下に贊。

岡田II同。但し、カンザシをやつたのは、町内の若い者などでなく、むしろ娘を誘惑しようとする年輩の男のような感じがする。

326 あったら若ひものべんべこを習ひ

門柳

川端II「べんべこ」は義太夫のことか？
習う目的は女にあるとの意であらう。

高須II「あたら」は「可惜」だから、働

き盛りの若者が三味を習うとは、惜しいものだという句で、「べんべこ」は義太夫と限らず、小唄、端唄類と見てよからう。前田「あつたら」は「あたら」に同じ。惜しむべき、もつたないの意で、あつたら後家をだだ置と知らぬやつ

(タル二〇)

という句もある。高須説に賛。
藤井「若いものから言わせれば、年寄りはずからず家だ、不粋だとくる。立場の差か。それにしても、今の若いものはレジャーを楽しみ過ぎると思う。小生等は、やはりこの作者と同列なのかもしれぬ。」
丸「諸説に賛。」

岡田「高須説に賛。」

327 恥しく芝居を態度娘ミル

眠 狐

川端「見合の句。」

高須「「恥すかしく」だから、見合の句には違いないが、それを「芝居を一度」と言ったところがうまい。この眠狐さん、作句も多いし、上手でもある。佳句。
前田「賛。「恥しさ」でなくて「恥しく」がうまい。」

藤井「一度の見合いでめでたく結婚とは、何て幸福な娘さんだと、「一度」が幸福を示している。」
丸「賛。」

となりさしきで見居るの恥かしき

(タル一七)

岡田「諸説に尽く。」

328 糞下井戸の廻りに座頭居る

梅 斧

川端「糞町は、江戸で一番柳營に近い町

名。座頭は盲人で、剃髪し琵琶・琴・三味線・按摩等を業とする者の総称で、金貸しを内職とするほど貯蓄心が強く、内実は裕福であったので、世間の同情は薄かった。また疑い深いから、井戸端会議にも聞耳を立てている、というのか。
高須「何かありそうだが、わからぬ。」
前田「盲目学者塙保己一が番町に住んでいたので、井戸端へ内弟子が現われることをよんだ句。」
藤井「かかる句は苦手。礎稿にあたると、頭痛の種となる。」

丸「糞町の井戸は、底が深いので名高かった。但し、所在地は神田明神の境内で、小路屋の井戸といったが、社前に五、六軒の麴屋があったところから、こうじまちの井戸ともいわれ、それが糞町にあるように思

い込まれてしまった。(江戸砂子その他)そして当時「糞町の井戸で、底が知れぬ」という諺まで行なわれた。本句はこの諺をふまえ、底の知れぬ程深い糞町の井戸のまわりに、蓄財にかけては、底の知れぬほど欲の深い座頭が住んでいる。まことにこれ適所に適者の存在であると、しゃれただけの句。なお「諺語大辞典」には、荒御魂新田神徳「よくよく欲の深いことは糞町の井戸よ」茶歌舞妓茶目傘「欲の深きは糞町の井戸茶碗」を引いてある。

岡田「丸先生説の御明解に感服、小生も教えられました。」
329 四郎兵衛が男とおもふ運のよさ

一 甫

川端「既出(17オ)の

285 男の姿で人目の関をこし

と同一句。四郎兵衛については清氏が詳細に記されたので略す。脱楼成功の句。

高須「「脱楼」どころでなく「脱廓」である。明治・大正時代には「自由廃業」というのがあったが、その江戸版で、よくよくの覚悟でなくては出来なかったことだ。
前田「諸説に賛。「運のよさ」で平凡。」
丸「賛。」

岡田「同。」

330 もてたやつ四ツ手外へ度々あまり

菅 江

川端「原本「四ツ手の外」のが脱字となっている。

「もてる」は遊所で優遇されること。「四ツ手」は布衣駕と呼ばれた道中駕で、町駕と称した辻待駕も、この四ツ手駕で、竹を四柱としたのでこう呼ばれた。
もてたこと四ツ手と嘲すはしたなき

(タル一)

駕の外へ顔を出すのか、小便に駕を止めるのか。

高須「「もてた」から、もちろん「睡眠不足」である。小さな四ツ手カゴのなかでは居眠りもむずかしく、一度ならず二度三度と、その外へへこげ出そうになるのである。
岡崎「賛。「もてた」ので「昨夜気」で、帰りのカゴから落ちそうになる。」
丸「同。「もてたやつ」理屈の句になっ

ている。

岡田「高須説に賛。昔の駕籠は相当ゆれたので、女などは酔って吐いたほどだ。睡眠不足で居眠りしたのでは、へたするところ

げ落ちる。

331 あまりりんしよくで柏の木から落

栞 水

川端「わからぬ。
高須「五月節句。昔は柏の葉を売りに来たらしい。だが、親父吝嗇で、それを買わず、柏餅をつくる段となって、柏の木へ登り、葉を取ろうとして、落ちた。——どうも持ってまわった解で「風吹いて桶屋よろこぶ」類だが、ほかには考えられぬ。三面子先生は「しかも隣の木に登り、叱られて」と言っている。呵々。」

前田「前説にとれるが、わからない。
藤井「高須説で了解。小生にはわからなかった。」

丸「高須説でよし。」
岡田「同。」

(20オ)

332 稲光根生わるがはやし

魚 交

高須「「根生わる」は「根性悪」で「意地悪」と同意。稲光がして、今にも雷が鳴り出しそうな空模様、カミナリ嫌いがビクビクしているのを、同情するどころか、面白そうに「それ、今にゴロゴロと来るぞ」と、はやしたてている、という句で、ウツのない素直な句である。
前田「賛。よく見られる景。」
藤井「「雷きらい」はどうも娘さんらしい。ウツがないどころか、この男何かこんながあるらしい。」

丸「高須説賛。「今にも雷が鳴り出しそうでなく、もう遠くで鳴っているのでは

よう。

岡田 同。

333 爪斗しまつて跡を楳頼ミ

長笑

高須 嫁が、客の所望で、琴を一曲奏てたのである。しかし、すぐ馳走の膳ごしらえなど、客のサービスにからねばならぬ。琴爪だけは、手からはずして爪箱へしまつたが、あとの琴のかたづけや何かは、召使いの者に頼んだ。——これも素直な句。
前田 贊。「ばかりしまつて」がよい。
藤井 馳走の膳ごしらえではなく、恥かしさのあまり、琴爪をはずすと、早々退散という情景で、初々しい嫁の姿と考える。
川端 藤井説に贊。

丸 同。

岡田 若い嫁が、大きな琴を運んだりするのは、客の手前みつももない。下女などに命じて、しずしずと退出……と、育ちのよさを見せた句と思つていた。

334 桐油などかけて天国売て来る

門柳

高須 天国（あまくに）というのは、鞘を払えば天が曇るといふ名剣。これを五月の空模様にかけて、節用用の菖蒲刀を売りに来ることにし、雨期だから油紙（桐油）をかけて、と言つたもの。

天国と菖蒲刀は出すと降り

（タル一四四）

という類句もある。

前田 桐油は、えこまからとつたえの油をひいた紙。雨覆、合羽などを作るのに使われた。菖蒲刀を天国になぞらえ、桐油

の雨覆をして売りに来る状景である。

丸 贊。

岡田 同。

335 八ツ過に出る月迄ももの日也

龜遊

高須 八ツは、いうまでもなく時刻の「八ツ」で「丑の刻」（又は「未の刻」だが、この句の場合は「丑」）で「午前二時」のこと。それで「八ツすぎに出る月」とは「六夜待」（二十六夜待の略）の月で、陰暦の正月と七月との二十六日の夜半に出る月を「待つていて見る月見」で、昔は頗る風流のものとされた。それで、その月見まで「もの日」にした、というのは品川宿の女郎達である。

岡崎 七月二十六日の八ツ時の月の出には、三尊の阿弥陀さまが来迎すると信じられていたので、九段、湯島などの高台や、品川、深川などの海岸に人々が集まつた。したがって、品川では

六夜待一ト宿つづく鬼すだれ
（タル五）
の有様だった。

丸 贊。

（タル五）

岡田 同。

336 ぜんさいく我れ八は大根

鼠弓

高須 何かの文句取りであろうが、判らぬ。
前田 ぜんさいは「よいかないかな」とほめる言葉。「善哉」と書く。「大根」は徒然草六十八段に、筑紫の押領使の家にあつたという、盗賊を走らせた「大根

武者」のこと。

筑紫にながしの押領使などいうやうなもの有りけるが、土おほねをよろづにいみじき菓とて、朝ごとに二つづつ焼きて食ひける事、年久しくなりぬ。或る時、館の内に人もなかりける隙をはかりて、敵襲ひ来たつて、かこみせめけるに、館のうち兵二人いで来て、命を惜しまず敵ひて、皆追ひかへしけり。いと不思議におほえて、日ごろころに物し給ふ共、見ぬ人々のかくたかひしたまふは、いかなる人ぞと問ひければ、年来たのみて朝な朝なめしつる土おほねにてさぶらふと云ひて失せにけり。深く信をいたしぬれば、かかる徳もありけるにこそ。（全文）

大根が出ぬと空家にされとこ（タル一五）
太い奴だと大根は敵を追ひ（タル三五）
盗人を大根辛い目に合はせ（タル一二）
辛き目を見せてくれんと大根武者
（タル五四）

以上の句によつても、意はあきらか。
岡崎 主題句は、大根武者が現われたときの口上である。
（前田氏引用の「徒然草」を、小生補足全文とした。）
藤井 小生もわからなかつた句。「善哉々々岡崎氏の補足」というところ。
川端 練馬の住人と名乗つて出（タル五六）
丸 贊。

練馬の住人と名乗つて出（タル五六）

丸 贊。

丸 贊。

丸 贊。

丸 贊。

丸 贊。

丸 贊。

丸 贊。

丸 贊。

丸 贊。

丸 贊。

品質優良
タチカワペン
TACHIKAWA PEN
大阪市東区高野町二丁目十二番地
立川ペン先株式会社



タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ面紙

岡田 同。

337 石切りに見知られる程美しさ

鼠弓

高須 墓石に刻まれた「赤い信女」すなわち「後家」の美しさが、その生き名を墓に刻んで、朱を入れた石工が、忘れ得ないという句で、この丁「後家」の句が他にもある。「後家」という題でも出たか？
前田 石切りの句に次の句があり、比較すると面白い。

石切りの覚えた歌は辞世ばかり
（拾二〇）

藤井 石工の審美眼は肥えている。余程の美人であろう。佳句。

丸 贊。

丸 贊。

丸 贊。

丸 贊。

丸 贊。

丸 贊。

丸 贊。

丸 贊。

丸 贊。

338

鯉をくい／＼ともかくもく

一 甫

高須 前に出た鯉料理の葛西太郎から、川を渡って繰り込む(もちろん吉原へ)相談をしている句。

前田 狂言口調の「鯉のくひ逃げやるまへぞく」(タル二〇)の句と同様、たいした意味のある句ではないと思う。「ともかくもく／＼」からは、いろいろと、次にかもし出される相談ごとの場合が想像される。

吉原行も、またその一つであろう。
丸 二 贊。

岡田 吉原行き相談。それ以外に考える必要なし。

339 すいりやうをして若後家をくどく也

秋 紅

高須 二 これも「後家」の句だが「推量」というのは「まだ若いから一人寝はつらからう」という所で、口説いたというので

あの後家はひだるかろうと思なり

(タル七二六)

と同想の、全く愚者の句。類句沢山あり。
前田 二 贊。「すいりやう」という言葉は好んで使っただけであろう。

丸 二 贊。

岡田 二 同。

340 金持て出たので娘しれかねる

秋 紅

高須 二 娘が家出をしたが、うちの金を持ち出したので、心中することは先ずあるまい。「しれかねる」が「たかがしれ」と同義にとれば、文句ないのだが……。

前田 二 「しれかねる」は、ゆくえが知れに

くい意であるが、心中を言外に含ませて解されたところ、賛成である。

川端 二 前田説の通り「行方が知れかねる」の意で、金を持って駆け落ちしたので、他国で世帯をもつ決心であろうから、行く先の見当がつかないの意。金を持ってなければ、知り合いの家でも探がせばいいのだが……。

丸 二 贊。

岡田 二 同。

(二〇ウ)

341 人化してまんちうと成る面白さ

一 甫

高須 二 「人けして」とカナがつけてあるが「人かして」でいけないのか? 大奥の江島のもとへ忍んだ役者生島新五郎のことを詠んだ句で、類句は

饅頭になるは作者も知らぬ知恵

(タル一)

ほか沢山ある。

前田 二 もっとくわしくいうと、饅頭の箱の中にかくれて、大奥に忍びこんだのである。だから「人化してまんちう」といった。平家物語に「翁は化(け)して失せにけり」とあるように、けしてと読むように、普通力してとはいわない。化身、化人等、みなケである。句は平凡で言葉だけのもの。

丸 二 贊。「化して」は、前田説のように、古風なもったいぶった表現で、滑稽味を出そうとしたものであろう。

岡田 二 「近世庶民文化」八十五号で、大村沙華氏が述べているように、「礼記」月令

の「腐草為(レ)螢」から発し、古文に出てくるのには「腐草化して螢となとかや」云々に「化して」とルビを振ってある。むかしはそう読んだのである。「変化」もヘンカと読むのは近代式で、むかしはヘンゲであった。

342 腕がぬけそふさと返す乳沢山

葉 十

高須 二 乳貰いにつれて来た赤子を返す町女房の句。「乳沢山」というのは、その女房のことで「腕がぬけそうだ」というのは、その子が「重い」とおアイソを言ったのである。本当は、そんなに重いほど育ってはいないのだが……。

前田 二 赤子を返すのは、乳沢山即ち乳母であらう。乳母は実母にかえす時「腕がぬけそうに重くなった」とあいそをいっているところ。

岡崎 二 高須説賛。乳沢山は町女房をみる。

藤井 二 「腕がぬけそう」とは重さに時間の相乗値の結果だ。乳沢山なので、乳を十分吸うのに、たっぷり時間もかかる。「腕がぬけそうだ」とはもったいな話。乳母はいつも乳を与えているから、この際はたまに乳をのませた町女房とみる。また「ぬけそうさ」のぞんざいな言葉といい、乳母なら返すとは云わないだろう。常にめんどうみている人だから。

川端 二 礎稿に賛。赤子を受取るのは男親か。

丸 二 乳沢山でまるまると育った子を、ちょっと抱かしてもらって返す場合と解している。

腕が抜けそうだとお世辞やら、うらやましいやらの心がこもっていると見て、抱かしてもらったのは、乳不足の母であらうか、もちろん町女房である。

岡田 二 丸先生の説に賛。乳沢山の子だから、丸々と肥っているのである。

343 駒下駄を野暮な舛履の中へぬぎ

一 甫

高須 二 「野暮な草履」は、鼻緒の太い男草履で、その中へ「粋な駒下駄」をぬぐというのは、踊り子である。留守居役に呼ばれた踊り子か?

前田 二 贊。駒下駄の句多し。

藤井 二 粋と野暮とのとりあわせとの礎稿に賛。

丸 二 同。

中ぬきの中にこま下駄ころんでる

(タル一七)

岡田 二 贊

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区源蔵町 5 (361) 9373代
支局 東京都千代田区神田鍛冶町2 (252) 4941代
名古屋 市昭和区村田町 2 (88) 9069



大陸放浪 (2)

砂金天国の街

東野大八

むかし、いや今もその街は立派にこの世の中に存在しているはずだが、北辺のアムール河の中ほど、プロゴエの対岸に大黒河という街があった。

私はこの街が好きであった。たった二回しか行ったことはないが、今となってもこの街の灯は、まだ強烈な光ほうを放ちながら、私の胸底に輝きつづけている。

黒河は、いま思えば駅馬車の着く西部劇の町そっくりの形態であった。もっともそれはアラスカの砂金掘者がうようよしていたころのそれであった。この町も当時、潢河の砂金ブームのただ中にあつた。

満洲国では、嚴重に賭博を禁じていたが、ここだけは政府公認の賭博場が町の大半を占領していた。麻雀、紙牌、四転射的、サイ

コロとあらゆるバクチ道具がそろっていた。バクチには酒と女がつきものである。パイ一の居酒屋から高級料亭まであり、公許阿片窟まで数軒あつた。女郎屋は頭等(一等)から四等まで遊軍の野鷄まで多数参加している。頭の方は、人並な姑娘女郎だが、四等あたりになると年令美醜を超越した単なる女体にすぎない。この女郎屋の特徴は、おでこに「王」と描いた虎模様のマクラがほとんどだった。酒をくらつてトラになり、巫山の夢枕にしるといふわけかもしれないがとにかく、女どもはみんなへロかモヒの患者で、その強烈な体臭が垢と分

必物で混合され、なんともはや明状しがたい体臭を発散していた。こうした女郎屋には、すべて皿坪があつて、遊客はその一方にチン、チンときれいな音をたてて砂金の小粒を落すのである。それによつて目もりがピンとあがると「テンハオ、イツツケ三日」てなことをホイイが叫んで家中に披露する。お客はやがてそういふことで話をつけると、女をつれて且那気取りで街を歩き、気の向いた店で好きなバクチをやり、一服すべく酒店、茶館へと入る。こうした店には野鷄(パン助)が網を張つていて、テーブルをめぐりカモとみれば流し目、その他で体当たりのサービスに出る。西部劇の酒場女そっくりに。

泥と汗と垢で異臭を放つ綿服や皮服、毛服を着込んだヒゲもじや、鼻もじやの人足共が、そうした女の尻をなで、股へ手をつつこみ、いろんなことをやって鼻の下をあけつぷろげにする。時たまヶ

明治川柳と風俗

⑤

奥津啓一朗

乗合馬車

江戸時代の末期に外人によつて創められた横浜箱根間乗合馬車に倣つて、交通機関としての馬車が、日本人経営で芝口一丁目西側家主八右衛門(初代川柳と同名)等により創められたのは明治二年七月で、廻転馬車開通の「告条」によると、五年七月に、汐留、神田、新三河町三箇所に見える。その頃市川田十郎・岩井半四郎ら撰する芝居の「千里軒」では馬車拳歌を舞台で披露人気をおつた。これは貨・客兼用のものであつたが、その後乗用車としての搭客馬車(のりあいしゃ)(当時この文字を用いた)は漸次車台を改良六年ごろに二階つきまであらわれたが、危険なので七年の末には禁止された。

馬車の中前後左右に舟を漕ぎ乗合で席を譲つた体のよき 同

馬車の中対角線の鉢合せ 守山

新聞の字が飛びあがる馬車の中 同

乗り合の女は雲が気にかかり 柳好

駆落の夜馬車に雨のしぶく音 哲笑子

俗に圓太郎というこの乗合馬車は、浅草新橋間をやみ雲に走らせていたが、十五年六月鉄道馬車の開通により、新橋から品川、万代橋(旧めがね橋)から板橋行と場末にと退却。

この乗合馬車市内の塵物が地方に流れ、地方では唯一の交通機関としてむしろ発屋した。

田舎馬車客の加勢でゆるぎ出し 信州山猿

田舎馬車甚だ静かでない車 三年子

癡(おこり)程頭の揺れる田舎馬車 骨青

田舎馬車膝と膝とをはさみあい 芝山

田舎馬車ラッパの度に犬が吠え 信州山猿

橋守りの声掛けて行く田舎馬車 静架

ガタ馬車を降りれば乳母の里が見え 深山

燕が後前になる田舎馬車 梅凌

女馬車乗合馬車に罵られ 歌丸

馬車の中弟のおしやべり姉困り 信州山猿

ンカも起るが、店の者も客も至極なれたもので、まるでアトラクションをみるようにワイワイいつているだけである。西部劇でよく酒場のカウンターあたりで腰の拳銃が飛び出し、派手に鉄拳が舞うところだが、あれと似たようなものである。だがみんな汚いニコ人足なので、ジョンウエンやジェームスチュアードのようにイナセに運ばないのが残念である。

こうした北辺の荒々しく粗野な享楽の街を、満洲国が公然と黙認していたことは、砂金苦力どもの足止め策の一つであることと、彼の懐の中にしている砂金や金をしぼりとる算段からきていたのである。

ともあれ、私はこの街をうろつきながら、渡河や呼鳴の砂金苦力の生活をきいた。彼等は半歳以上も雨の中で籠城する。金より砂金を欲しがりつつ、酷寒の凍土で苦闘し、悲惨な半歳のあけくれを送るのである。その仕事にしがみついているのは、一重に黒河での羽花登仙の享楽の数日のためだといつても過言ではない。

春になって雪どけがくる。その泥水の急流は、山籠りの彼等に魅惑の水音をたて、街への烈しい欲望のうたげへと馳りたててやまないのである。

気早な血の気の多い連中は、その流れに立つとたぎる血潮で矢もたてもたまらなくなる。女の柔かい肌、官能をしびれさせこの世の苦勞をすつとばしてくれるうまい酒。そして一六勝負のハイチーボンだ。その幻想はこうこうとなりたてて奔放する濁水によって一段とエキサイトする。かくて彼等は意馬心猿の無謀な野獣と化す。行こう黒河へ彼等はアパッチの如くハッスルする。

腰にしっかとノロの皮の重い奴をしぼりつけからみつける。中味は砂金だ。このために彼等は札束や重い硬貨を嫌うのだ。やがて足や胴体を生命の綱で太い丸太に結えつけると、彼等は腰の砂金を唯一無二の財産として、濁流に押し流して貰うのだ。雪解けの水は、切刃の束のように身を責め、その冷気には瞬時も耐えられそうにもない。しかし彼等はゆく。文字通り生命をかけた天国への直線コースだ。死んでも天国(イヤ地獄かな)生きても天国、生あればそこは酒と女とバクチのキラメク星座なのだ。

かくて半死半生の身体を黒河近くへ運び得たものと、ホトケ様と変じて目指す彼岸へたどりつくという二様の人間ができ上がるわけだが、よくしたもので、丸たん棒と

人間を待ちかまえていくれる拾い屋が、適当なところで長い手カギを振り立てて待っていてくれることだ。死んでしまえばオタカラは彼等のものだが、少しでも息があれば砂金には手をつけたい。この仁義の固さは思いのほかのものがあるそうだ。

私はこの丸たん棒と抱き合い、濁水に身を投じていく人間に對し、瞳目(どうもく)しながらも人間の本能の空おそろしさに三嘆した。しかし、その後味にはそほくな大自然の中の人間性に深く胸打たれずにはいられなかった。私が黒河を想うのは案外こうしたところにあるようだ。

黒河のアムールホテルの窓から、ブラゴエチエンスクの灯が銀砂子を撒いたようにみえる。そこから時はすがしい音楽の流れを耳にした若い私は、大海原の白夜のごとき、北滿の蒼い夜をただうつけたように見入ったまままたうた。その天地自然の神ながらの青い風の中から、やがて昭和二十年夏、戦争と潮の如き人間共が、殺りくの雄たけびをあげながら、津波のように満洲国を席捲南下していったのである。アムールの濁水はこのとき、どういう感慨をもって、死の街黒河の岸辺を洗ったことであろうか。

一方鉄道馬車は二頭立て、深紅の車体に赤ヒロドの腰掛、いとも華やかで、新橋から日本橋まで開通の当座は珍らしがられ、用もないのに乗る者も多くあったが、追々線路を延長すると共にこれが又曲り角でちよいと脱線したので、お急ぎの方はお歩き下さいという始末。馬の小便で線路はぐちゃつき、臭気で沿道は大変なもので、これが二十八年電気鉄道に代わるまで続いた。

安政開港のち輸入されたランプは、明治五年にはその取扱いに對し東京府令が出るまでに普及し、

外に瓦斯燈内にはランプ

人の車の三筋街

と詠まれるようなご時世となつた。行燈の灯や蠟燭に慣れた眼には随分と明るかつたに違いない。

赤洋燈除けて按摩を坐らせる

赤城子

かるた会乳母ランプをもちがかり

鉄耳

子沢山洋燈を高く釣り上げる

偽法子

洋燈に蜻蛉勢よく当り

用には丸心の燭台形などもあった。

くすばった二疊苦学の豆ランプ

置洋燈笠に学若し成らずんば

本借りてランプ持込む蚊帳の中

二三行読んで洋燈を太くする

魂はランプの前に落附かず

心待ランプの燃ゆる音計り

洋燈の音能く聞くまでに黙想し

黙読に汗の滴たるランプ際

ソラ風と洋燈押えて鼻で消し

手内職洋燈に顔の附せて見え

新し紙幣は洋燈へ持つて行き

御暇をすると洋燈が付いて来る

この跡始末が又大変で

掛り人注掃除が一の役

柳亭

雲突坊

水日亭

春滋

眉愁

劍花坊

東四郎

三年子

三面子

吉田羽

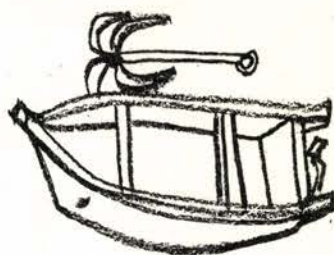
悠暢なもので

洋燈屋の棒折れそなた荷ひ振り

と行商も出来た。交通難の今日からは想像も出来ない静けさが都市にもあったのだ。

三面子

吉田羽



句評と鑑賞

清水白柳

句は一篇の小説を読むような気がするのである。

習慣は軽いフトンが頼りなし

雄声

いつも古い綿のドツシリとした布団に寝つけていると、布団というものは重いものだと思ひこんでしまう。習慣というものは恐ろしいものである。それをすばりとして、たまたま大きいのが軽い布団に寝かされると何かしら物足りないう感じがするのである。その感じを頼りなしと詠んだのは凡手ではないと思う。

もう寝えや親が受験の子に言われ

庸佑

受験期の子供がおそく迄勉強しているのに、親がつき合いて起きているという句は沢山あるが、その子供に「お母さんもう寝てや僕一人でもやるから」と親をいたわる句はなかった。そこにこの句の面白さがあると思う。親が受験の子に言われという表現が温かい気持ちを感じさせるのである。

押すだけという大人を馬鹿にし

光郎

たカメラ

芳郎

あらゆるものが日毎に進歩してゆくのは有難いことである。手数のかからないように、より便利にとメーカーは研究をつづけているのである。併しこの句のようにカメラ一つをとり上げて、ピント

を合わせて、絞りを考え、露出をきめるという楽しい動作がいらなくなつたカメラは、どう考えても無味乾燥である。それを大人を馬鹿にしたという句語によって抵抗しているのである。

美しい

バツジ

一個 二百四
送料 一〇円

料理屋の格が割着からわかり

雅城

別れ話でなく協議離婚が成立したのである。そしてその別れにも何がしかの未練があるのだが、男としてその未練に打ち勝つてゆくための心の中の戦い、そうした心の動きを、振り向いてなるものかという独り言のような句語の中にすべてをふくませているのである。この作者の力量にふさわしい立派な句であると思つたことである。

飼犬にほえられている日本髪

花村

軽いユーモアとうがちに富んだ好ましい句である。飼犬であるから他所の犬ではなくて、自分の家の飼犬なのであろう。いつものバームをかけた頭ならじゃれつくだが、今日は頭の上に妙なものが乗っているのだ、犬の方ではその頭の上の化物にはえているのである。この作者の句には亡き豆萩さんの句に似たものを感じさせられるので、いつもたのしく読まされて戴いている。

この作者は最近三回も本社句会で不朽洞盃を獲得している優秀な作家である。この句のよさは、継母がまだというこのままだの二字にあるといえる。どこか水臭いというか、わが子にさんをつけて呼んでいるのであろう。矢張り親近感というものはこうした敬語一つの使

不朽洞盃会員のシンボル

美しい

バツジ

一個 二百四
送料 一〇円

料理屋の格が割着からわかり

雅城

私等が気づいていながら句に出来なかったことを、この作者はよくつかんで現わしている。それはふだんから物を見る目が練磨されていることを物語る証拠であると思う。

立見して自分の足が邪魔になり

隆史

無意識に首をのばして、足をどこかのすき間にでも割りこませようとしている動作を詠んでいるのである。それを自分の足が邪魔になるという現わしかたをしているのが仲間面白いと感じたのである。

継母がまだ呼び捨てにしてくれ

珠笑

この作者は最近三回も本社句会で不朽洞盃を獲得している優秀な作家である。この句のよさは、継母がまだというこのままだの二字にあるといえる。どこか水臭いというか、わが子にさんをつけて呼んでいるのであろう。矢張り親近感というものはこうした敬語一つの使

句評と鑑賞は違ふと言われたことがある。その通りだと思ふ句評はその句の欠点、美点を指摘する立場に居なければならぬのである。それがなかなか出来ないで、ともすればお座なりの賞め言葉の羅列に終わってしまう場合が多いようである。出来る限り私はこの句のどこが良いのかという、何故か、ということに対してお答えするよう努めたいと考えて句評を進めたいと思うのである。

ちと鈍い子なのに單車うまく乗り

無鬼

せられる句である。何をさせてもちと鈍い子を句にとりあげていながら、その鈍い子の中に一つの才能を見つけて、それでホッとしている作者は、山下清画家を育てた式場隆三郎先生と同じような気持ちではないだろうか。

勤務先よく変る娘に仕送られ

光郎

恐らくこの娘さんは事務系統の仕事をしていないのだろうと思う。水商売か何かよく金のはいるところに勤めているのも、親に仕送りをしなければならぬ運命を持っていくからだろうか。この

作者の温かいまなざしを感じさせる

い方にも大きなウエイトを持って
いるのである。早く呼び捨てにし
てほしいと願っている子供のいら
いらした気持ちをまだという二字
にふくませているのである。

飲んでても断る思案忘れてず

柳志

課題が誘惑なので作者は、二次
会に誘われているのを断る思案
しているのか、梯子酒になるのを
恐れているのであろうと思った。
然し、この句は課題をはなれて考
えてみると頼まれた金策か何かを
断る思案しているようにも思え
るので面白いと思った句である。
男装をして故里を口にせず

花 梢

故里のことや親兄弟のことを言
いたがらない気持ちは男装をして
いる女の人の現在の立場を如実に
伝えているということが出来るよ
うである。この句は本社句会で私
が天に抜いた句よりも深いものを
持っているように思った。活字に
なつてからゆつくり見返すとそこ
にまた違った味わいを見出すこと
が出来たことを知らされたのであ
る。

ここで曲っているので坂道を振
り返る 白史

感覚的にすぐれた句というものは
象徴的になり易いものであるが
この句は坂道で振り返るとい

金泥集

選乃菫生麻

「駅弁」

鯛めしをばくつきなら窓の富士	阿茶
寝台車駅弁車掌にたのんどき	同
駅弁のおかず一々嗅いで喰べ	同
旅なれて駅弁を買うタイミング	同
駅弁のおいしい駅も教えとき	一栄
駅弁の一つで足らぬ食べざかり	同
色どりにますい駅弁カバされ	同
団体の駅弁契約駅で積み込まれ	同
駅弁をホームに降りて買うスリ	清子
発車ベル駅弁リレーの様に受け	同
世話やきが自分の駅弁買ひ	同
駅弁も予約してます社の旅行	同
向き合つて駅弁食べてからの連れ	酔夢
席あかず駅弁遂に帰宅する	同
うまさうな駅弁つられて買うも旅	同
駅弁はおよしと母のにぎりめし	同
方言も添えて駅弁釣銭をくれ	きさ子
駅弁を開けるたのしみ旅が好き	同
冷春の被害駅弁にもひびき	同
駅弁へ新茶も出たぞ五月晴れ	同
駅弁の残りも包んで母の旅	同
駅弁へしのび込ませた	同
駅弁も忙がしう売れる新幹線	同
洗面の序駅弁買いに降り	同
発車ベルもう駅弁がまに合わず	同
駅弁へ千円札は可愛そう	同
居ねむりを起こして駅弁通り	同
たのしみにした駅弁を買ひ	同
駅弁のここから先はローカル線	同
駅弁も買えぬスピード旅続け	同
駅弁を土産に買ってババ帰り	同

語を持っていて、吾々にもよく理
解されるのがよいと思った。殊に
ここで曲がっているのかという心
にくいまでの心の動きをつかんで
いることに注目したいと思うもの
である。

庭見てちやもうかりまへんとピ
ルを建て 弓彦

参道でうちの忍者はべそをか
く 美代
この句のうちの忍者という句語
に非常に面白いものを感じた。平
安四月号の中に「春や春わが家の
忍者入学す」笑雪というのがあっ
て作品批評に採り上げたのだが、
それはわが家の忍者という句語に
ひかれたからである。この句はう
ちの忍者であるから平安の句と
は、わが家とうちのの違いなのだ
が、わが家の方は入学を詠んでい
るし、うちの忍者はべそをかくと
いうそれぞれその文字にふさわし
い事柄を持ってきてその持ち味を
生かしているのが面白いと思つた
のである。

金詰りそのうちなんとかなるだ
ろろ 清夢

酒 清



灘・魚崎

金露酒造株式会社釀

植木等の「金の無い奴や俺んと

こへ来い、俺もないけど心配すん
な、見ろよ青い空 白い雲 その
うちなんとかなるだろうこの唄
を知っているとこの句は面白いの
だが、若しこの唄を読んだらどう
感じるだろうかということであ
る。そのうちなんとかなるだろう
では当たり前ではないかと思うだ
ろうが、そのところが一寸気にな
るのである。唄を知っているの
で面白いということだけではいけ
ないのだろうか。
以上で句評を終わりますが、自
分の句を作ることに精進してほし
いと思う。それぞれの立場で他の
人が詠むことに留意すべきであろ
うと思う。

次回題「鍵」〆切六月末日

金泥集への投句は川雅婦人友の会
会員に限る。入会希望者は大阪市南
区二ツ井町二三山川医院山川阿茶
理事長宛に申込まれたし。会則をお
知らせする。

(電話 大阪 二一四四三)

外来語のあれこれ



若本多久志

昨年、香港へ参りました時、九龍波止場のビルの屋上に「勞力士」と書いた、大きなネオン看板があつたので、ガイドに、「あれは何の広告？」と訊ねた処、ローレックスという時計の広告だということでした。勞力士と書いてローレックスと、読んだり読ませたりする中国人はさすが、文字の国の国民だなあと感心した訳ですが、気をつけて見ると街を走っているタクシートのボディに表示されている会社名が「大平的士」とか「九龍的士」とかいて、大平タクシー、九龍タクシーと読ませるらしい。又、バスの停留所には、「〇〇巴士停車処」と書いてあり、実にうまい当字を考えたもの

だと、益々、感心して同行の友人にこの話を致しました処、「そんなに感心せえでも、日本人の方がまだ上手に外国語を、日本の文字にしたり、言葉にしたりしてやるやないか」と申しました。

それから私は日本に帰って、興味をもって調べてみた処、なる程、あるわ、あるわ、さすが言葉の国、と言われるだけに、到底、中国の比ではない位にあり、然もそれが我々の日常生活の中へ巧に取り入れられて、ことに驚き入った次第であります。

データーが大分古いので恐縮ですが、明治三十五年頃、初めて出版された大槻博士の「言海」という辞書に出ている言葉が約、四

万語、その中で所謂、和語と言われる日本古来の言葉は、約半数の二万零八百語、漢語が一万六千語、和漢熟語が参千語、梵語四百四拾、オランダ語三百六拾、朝鮮語百五拾、スペイン語百八拾、ポルトガル語参百参拾、フランス語百八拾、ラテン語百七拾、アイヌ語百四拾、外に日本語と外語の混合語が約千貳百語ということになってゐるそうです。

それ以来、六拾年間、一層諸外国との文化交流が激しくなつてゐる現在まで、恐らく外語の輸入数はこの三倍——五倍にもなつてゐるのではないと思われまふ。

先だつて、確か阿倍野句会の兼題に「御転婆」というのが出た時にふと、おてんばという意味はよく解つていたので「御、転婆」という文字と、その言葉のニュアンスが余りにも違ふ様に思われ、辞典を繰つてみて思はず、ウナつてしまつた訳ですが、これはオランダ語の *omwentel* (御し難い) という言葉から生まれたもので、おそらく当時長崎あたりで来ていたオランダ人に交渉を持つた若い娘さん達のジャジャ馬ぶりを見て、オランダ人が、オートンパー、オートンパーと言つてゐたことから、若い女のハネ返り者のことを、おてんば娘といふ

様になり、漢字では「御転婆」と書いて読まず様になつたのだろうと諷解出来た訳であります。

又、我々はよく「ウンともスンとも言わぬ」ということを申しますが、この「ウン」はポルトガル語の「*un*」の数で「*sun*」は億とか兆とかいう最高数なのでありまして、江戸時代の初め長崎に來たポルトガル船から伝えられたという花札の一種に「*un sun* カルタ」というのがありまして、当時の日本人の間にもはやされたものらしく、このゲームで自分の持札が負けてくると皆、黙り込んでしもうので、仲間の者が

「おい、ウンとかスンとか言えよ」と言つたもので、それから起つた言葉だということあります。

昨年、オリンピックの時に外人案内役として婦人ガイドが募集されました中に、六カ国の会話が出来たという方がありまして感心したので、実は皆さんにもこれ位の語学がお有りになるんですから、そんなに驚くことではないと思うのであります。

「例えばキャバレーでビールを飲んで、エネルギーをつけてから、そのホステスとデートに行つたよ」となことを言われたとすると、「キャバレー」はフランス語「*cabaret*」はオランダ語「*en* エネルギー

はドイツ語「*hostess*、*date*」は共に英語ですから、「行つた」という日本語を加えると実に、合計五カ国語を巧にチャンボンで話したことになる訳であります。

この「*chanpon*」が又、中国語でありまして、いろいろな材料を煮込んだ中国のそばの名前であるというに至つては、実に日本語の面白さが益々、興味深くなつて参ります。

役所や会社で昼になると「おい、昼めし、何にする？」
「僕は、パンとミルクや」
「僕は、オムレットとライスや」
などという会話をよく聞くのです

が、これも「*pan*」はポルトガル語「*milck*」は英語、「*omlett*」はフランス語「*rais*」は英語と云うのですから、日本語共で四カ国語の会話になるのであります。

こういう風に我々は、実によく外来語を日々の生活にだけ込められている訳ですが、それをあらわす文字に於ても、先にお話した中国人の「勞力士」や「的士」に劣らない様な、表現を致しております。

一例を挙げますと、オランダ語のビールですが、中国（広東地方）では「生力啤酒」と書きますが、日本では「麦酒」と書いてビールと読ませています。たしかに日本の方がビールというニュアンス

スを的確にしている様です。

その他、ネジ(オ) 螺子、パン
(ポ) 麵麴、バター(英) 牛酪、
ラッパ(オ) 喇叭、ブリキ(オ)
鉄力、タバコ(ス・ポ) 煙草、ガ
ラス(オ) 硝子、ボタン(ポ) 釦
ガンモドキ(ポ) 雁擬、カボチャ
(カンボジャ) 南瓜、等中には少
しどうかと思うものもありますが、
大体よく出来ています。一()
内は言葉の国名一

面白いのはガンモドキですが、
古川柳に

尼寺の御用は今日もがんもどき
というのがありますから、大分古
くからある転用語らしいと思いま
す。

次に日本製の外語の話ですが、
皆さん「リヤカー」というのをご
存知でしょう。

リヤは後、カーは車、ところが
が英米の辞書のどこをさがして
も、こんな英語はございません。
完全なジャバイングリッシュな
のであります。

アルバイトサロンのアルサロ。
クレオンとパステルを足して二で
割ったのが、クレパス。フランス
語のオムレットと英語のライスを混
合して「オムライス」ドイツ語の
「シヤン」一美人一に日本語の
「とても」という形容詞の上、二
字をつけて「トテシヤン」

フランス語のサポタージュの
上、二字に日本語の動詞をつけて
「サポッてい」

又、上二字だけに略して日本語
になっているものでは、ドイツ語
の「デマゴギー」を「デマ」一デ
マを飛ばす一などと言ひ、フラン
ス語の「デモンストレーション」
を「デモ」更に動詞化して「デモ
る」等とも申します。英語の「コ
ネクション」も変なところで「コネ
等」と言ひます。

外来語の上に日本語の「お」を
つけて「おトイレ」

「おトイレはどちらでありますの
？」等と訊かれるとぞっとします
が、「シヤ」とか「ブー」とか
の音を入れる処と解釈すれば、
ユーモアがあつて面白いと思ひ
ます。

又、キャバレーやバーの女が
「おセックス」などと申します
が、これもなかなか上品で、よろ
しい。

お話が少し落ちて来ましたので
元に戻しまして、「面白いのは、知
つた人が死んだ時、

「あいつ、遂々、ゴネよつた」
「そうかアやっぱり、ゴネたか」
等申します。「ゴネル」というの
は、仏陀寂滅の時を「御涅槃」と
いうその「ゴネハン」から転化し
た言葉だということ、さぞ、お

釈迦さまも苦笑しておられること
だろうと思ひます。

我々の着ている洋服を「セビロ」
と申します。字で書くと「背広」
ですが、これも一寸意味が解らな
い。調べてみると、

civil clothes—civilianの服一
即ち、市民服というそのシビル、と
か、シビリアンから転化してセビ
ロとなったものだと思つて、ハハ
ーンと納得出来る訳であります。

更に面白いのは「リヤンコ」と
いう言葉がございますが、これは
中国語の「兩個」即ち二つという
言葉をもつて、日本語にしたもの
で、江戸時代、武士が刀を二本さ
しているのを士のことを、町奴や
職人衆が、侮蔑した呼び名で、
「リヤンコ」と言つたさうです。

又、我々の若い時にはアベックと
いう様な、ハイカラな言葉は無か
つたので、男女二人づれでどこか
へ行つたりした時
「リヤンコで行つて来た」等と申
しました。皆さんが寿司屋さんへ
行つて

「オイ、バッテラ一丁！」と注文
しておられる「バッテラ」はボル
トガル語のボートのことですが、
おすしのバッテラがボートの型に
似ているので、何時ともなくそん
な風と呼ばれる様になつたのだろ
うと思ひます。

それから「カーキ色」というの
がありますネ、これは印度語で
「カーキー」と言つて、「土ぼこ
り」の事なのであります。日本人
はこの土ぼこりの色を持って「カ
ーキ色」と命名、完全な日本語に
した訳です。

こういう風に調べて参りますと
面白い言葉がたくさん出て参り
ますのと、何気なく使つている言
葉が、英語だと思つていたらオラ
ンダ語だったり、フランス語だつ
たりして、驚くことが多いのであ
ります。

先ず「シヤケ」一鮭と書きま
す、これがアイヌ語だということ
をご存知の方は少ないと存しま
す。昔の人がよく着た「厚司」も
同じくアイヌ語です。

この様にすっかり純粹の日本語
になつてゐるもので「瓦」一皿」
等は、梵語が中国、朝鮮を経て日
本へ来た言葉でありまして、「煙
管」と書いてキセルと読んでいる
のがカンボジア語でありますし、
更紗はジャワ語です。

幕末の頃、フランスの軍人が陸
軍の教練を教えに来て残してい
た言葉で、今も使われているのが
「ゲートル」「マント」等です。
まだまだ、お話は尽きません
が、もう選が出来た様ですからこ
の辺で失礼致しますが、別表に、

外来語を国別にしておきましたの
でご覧下されば幸いです。

オランダ語

コーヒー。ガラス。ポンプ。コ
レラ。ソップ。(スーブ)。メス
スコップ。コック。セル。(織
物)ゴム。コップ。コンパス。
ランドセル。ピント(焦点)カ
トリック。サーベル。

ポルトガル語

カッパ(合羽) カンテラ。ミイ
ラ。シヤボン。カルタ。カステ
ラ。ピロード。トタン。

フランス語

クーボン。シック(シヤレて
る)シヤッポ(帽子)シヤンソ
ン。コンクール。カムフラ
ジ。マネキン。ニュアンス。マ
ヨネーズ。メートル。レストラ
ン。デラックス。ネグリジエ。
パリカン(会社の名)ビュッ
エ。ブルジャア。プロレタリア。

ドイツ語

セレナーデ。レントゲン。ワク
チン。メンス。グレンデ。ヒス
テリイ。ポリエチレン。

ロシア語

ノルマ。トーチカ。

中国語

メンツ
朝鮮語
寺。チョンガ。



逆境へ花は無心の香を流し
泣き顔を見せない寡婦を意識する
燕来て鶯が来て物価高
巾電がつづき故人の巾に触れ
口ずけば自然へ溶ける岩清水
倒産はしたがお稲荷さまは無事
電磁器のように都会へすい込まれ
障子一棹猫と燕に貼り残し
暴力も与論の前にくづれかけ
待ちかねたようにほぐり春を過ぎ
軍鶏の足思わずようなハイヒール
下見して二回目も迷う女客
ネクタイの柄を選んだ嬉しい日
サーブ品買ったつもりが高うつき
ピンボケもよし思出のハネムーン
水入りの二度目の勝負あつげなく
再会へ二人の運命狂わせた
一本のタオル羞恥を押しつける
バナナみな青く旅愁の陽につきり
今どきに一円玉で拝む人
百円の差に飛び付いた主婦の悔
浮気には触れず腹いせの結城買う

新居浜市 安藤 桂仙
大阪市 岡本 幸子
香川県 三井 酔夢

注射までうって団体旅行に出
新興都市文化財は荒れたまま
展望台立てばこんな平和な街に見え
春らんまん喪章も数珠も忘れて来
車だけの怪我でよかった人ばかり
道頓堀川けだるく春の灯の化粧
鋸の最後はいたわる音で断ち
チャンネルを探り独りの夜の長さ
小児科で読んできただけニューモド
クレীনを仰げば男の顔になり
歌も消しニューも消して母は病み
兄が乗せ弟が降り母の旅
磨くだけ磨き入学式へ妻
晩酌に笑いが止らず孫泊る
嫁に根がついてそろそろ癖も見せ
席ゆするほろ酔それが娘は不安
水虫のぼやきは月へ行く科学
花が好きなどと桜を折って去に
石橋をたたきすぎたか誤解され
花の下割箸着の音で割れ
戸を足で開けそうな娘の末思う

竹原市 杉原 愛鳩
青森県 岩淵 一星
羽曳野市 井上 圭太
新居浜市 近藤 凡生

(324) 高橋 月南

(一) 高橋多佳次 (二) 月南(三) 三茶(四) 神戸市灘区備後町五丁目一九(五) 明治二十年一月十一日(六) 山形市薬師町一丁目(七) 元公務員(八) 呼出 三六〇七(九) 同情は後戻りして銭をやり(一〇) 益裁及絵画(一一) 有(一二) 大正八年頃

(325) 中島 一二三

(一) 中島金吾(二) 一二三(三) 秋月(四) 東京都品川区西大井四丁目四番十号(五) 大正十三年二月六日(六) 東京都新宿区市ケ谷田町一ノ三(七) 理容業(八) 〇六八八(九) 震災と戦災に生き灰に生き(一〇) 雑筆(一一) 有(一二) 昭和十五年四月

タケダ薬品



激しい疲れ 神経痛
神 経 痛
肩こり・腰痛
心臓病にも

▲アリナミンのもう!



灰皿へ思案のあくを積み重ね

同

貧相な弁当鹿に見破られ

同

溜息をとがめるように子が見つめ

同

ガム噛み噛み大仏見上げられ

同

夜更けまで他人の春へ踏むミシン

同

感覚のずれを悟っている無口

同

あどけない寝顔が再婚にぶらせる

同

船酔いは承知で発ったハネムーン

同

不幸な魚バケツの水に住み

同

葉桜の下で来年来るブラン

同

売られゆく植木とも知らず咲き香り

同

女房の良さは他人が決めてくれ

同

三万円の椿の落花拾いかね

同

葉桜になって休みをとる仲居

同

前栽も無いに植木すゝめられ

同

孫のような工員と春斗の旗を振り

同

桜観に来てついでに寺まいり

同

下請は悲し春斗は夢の夢

同

二三日のおかづも揃え妻は旅

同

賃上げを物価笑って抜いてゆき

同

今朝靴みかくのパパ末っ子不思議がり

同

ストなんかせんでも物価あがりよう

同

選挙近しボスの動きも落ちつかず

同

盃に友情うつすほど注がれ

同

鯉のほり母の内戦でひるがえり

同

泪の底にいととき影を浮べたり

同

原色を身につけ明治の気にさわり

同

観音様が好き亡母によく似ておわす

同

闘病記猛暑に負けて来た余白

同

まづい字に真心読んだなつかしさ

同

廻り道して人生の裏が知れ

同

意見する親は時代の差を云わず

同

学ぶ子に生活の危機はふせておき

同

玩具買うように車せがまれる

同

退院も暦にまかす気の疲れ

同

打診する愛情すねた背を向け

同

三男が落ち目の家業継ぐという

同

日曜だから目覚めの良い子供

同

いつ来ても迷う団地を母愚痴り

同

玉串に二度目の愛の誓い立て

同

床屋から舟木一夫の髪で出る

同

派手なもの着てもやっぱり姉女房

同

恐ろしや鹿せんべいも値上げなり

同

好きのスも云わずデートまだつづけ

同

(326) 北村 三歩

(一) 北村 宏 (二) 三歩 (三)

(四) 鳥取市立川町二丁目一

八三 (五) 大正十四年七月三日

(六) 現住所に同じ (七) 自動

車板金工 (八) (九) 好きや

好きやの一本槍でもらた妻 (一〇)

将棋 (一一) 有 (一二) 昭和二十

五年四月

(327) 市場カネ女

(一) 市場カネ (二) 市場カネ女

(三) (四) 大阪市生野区新

今里町四ノ九九 (五) 明治三十九

年一月一日 (六) 奈良県吉野郡大

淀町下市 (七) 和裁師 (八) 備七

〇〇七 (九) 働く喜び針だけが知

つてくれ (一〇) 緑の野山を歩く

事 (一一) 有 (一二) 昭和三十五年

(328) 菱田 満秋

(一) 菱田柳男 (二) 満秋 (三)

(四) 東京都大田区大森西三

丁目三十二番十五号 (五) 昭和三

年三月十日 (六) 旧満洲国撫順市

(七) 運送業 (八) 四八四一四

(九) 男の眼すでに衣服を剥いで

おり (一〇) 旅行・麻雀 (一一)

有 (一二) 昭和二十七年秋



プロポーズも彼女離婚もまた彼女	同	入信をしたらし仏壇焼いており	同
蛍の光担任先生だけが泣き	高知県 山川 勝子	事故現場しどろもどろの答弁し	七尾市 松高 秀峰
スカート膝が気になるお茶の会	同	年頃の娘のPR酌もさせ	同
孫はもう踏台でとる智慧がつき	同	よそ目ほど楽じゃないと如才なし	同
葉桜も又よし酒も追加され	同	萩みかん春の朝日に艶を出し	萩市 和泉 松風
はづかしさ半分二次合格者	石川県 大山 雅城	顔色をそつと伺い出す家計	同
パチンコに通う根気があるものを	同	紙桜一夜の内に駅で咲き	同
堂々の押出し小卒の履歴	同	羊かんをも一つ喰べて妻夜業	宿毛市 渡辺伊津志
働き手の母晴場に出たがらず	同	合鍵で義父を満足させる齡	同
この恥を忘れてなろか独り飲む	石川県 三宅 ろ亭	最後まで聞いて自惚れ確かめる	同
忘れもの一日一度するも齡	同	初孫に母ともめてる有児法	大阪市 山田 李鳥
さみしさは自己にそむいて去った人	同	恋知らぬガイドの語る比翼塚	同
忘れた旧師に街の角で会い	同	神主を招んでホテルの近代化	同
玄関で又撮っておくランドセル	金沢市 根上 杏花	国宝へ眼鏡掛けたり外したり	島根県 竹内 祥二
四人目がお腹に感じて来た思案	同	山の湯に地酒が欲しい雪となり	同
マスクまでアクセサリーの気か女	同	十年も一日内閣総理殿	同
甲高の足がまごつく既製靴	同	屋根裏の配線見ればこわくなり	岡山県 牛房 護士
見ておれと自惚れだけはまだ捨てず	鳥取市 近藤 秋星	独身を通し養子を考える	同
笑うまい本人だけが知る苦惱	同	仮眠する日向明日を忘れさせ	同
卵一つ生むのに鶏の仰山な	同	市長選おれがおれがもう六人	天本市 高木繁太郎

(329) 吉原紅月

(一) 吉原種三 (二) 紅月 (三) 娘句童 (四) 兵庫県高砂市阿弥陀町阿弥陀一九八一 (五) 大正十五年四月十二日 (六) 現住所に同じ (七) 国鉄職員 (八) (九) 美しい言葉で他人の子を叱り (一〇) 謡曲、菊作り (一一) 有 (一二) 昭和二十五年夏

(330) 岸本木魚

(一) 岸本勝一 (二) 木魚 (三) (四) 橋本市隅田町山内二〇九ノ一 (五) 明治四十二年一月十二日 (六) 現住所に同じ (七) 信用組合役員 (八) 五条局・三三一四 (九) 家中の溜息母のひとりずる (一〇) 囲碁 (一一) 有 (一二) 昭和五年一月

本

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話四三三四番



立売りの真先き手を出すのに釣られ

同

米転の辞令妻も涙ぐみ

同

ほくろまで忘れさせない人となり

河内長野市

森本恵天子

転動の淋しさ誘う花が散り

出雲市

影山 青三

眉毛引いたがしわだけは残り

同

今暫しつづけて見たい今朝の夢

同

春うら、突然に来て金を貸せ

神戸市

吉田 隆史

殺し屋に昇格されて旅支度

神戸市

大野木真砂

売約済と聞いて一層欲しくなり

同

根性をみる革バンド頰に鳴る

同

庶務係今日は自分の辞令書く

大阪市

中川 滋雀

くたびれた土に酷しく値のくずれ

パロアルト

齋藤 流路

授業料知らせたくない都合つけ

同

キリストの天を仰げば宇宙船

同

倒産が近いか硝子破れたまま

大阪市

西本 保夫

みの虫は顔を出したり引込めたり

香川県

伊藤 歌子

勧誘員熱意ほめられ断られ

同

引揚の縁を持ち合う句の集い

大阪市

谷本 溪湖

火葬場が出来て順番気にしだし

兵庫県

斉藤たけお

金婚に近く二見に子が迎え

空岡市

谷本鈍愚坊

風邪だけは金持並みに順に引き

同

亡き妻を偲びつ酔うた喜寿の酒

長崎県

大崎 筆染

去年まで米がとれてた新市制

大阪市

藤富 淀月

実印を捺すに思案のいる証書

松江市

岡崎 祥月

置傘のゆとりもつける妻になり

同

開発の手が伸びて来る青田刈

大阪市

木村 濁水

長男も百姓捨てる職安所

尼ヶ崎市

岡本 昭三

三面鏡もう世帯やつれの顔になり

大阪市

谷川 源川

ポロ口の話聞くだけ地味に生き

同

手さげ縫う小切れあつめて祖母達者

大阪市

大池 芳

川底の屑拾う人捨てる人

神戸市

友国 えつ

行末の思案も出ぬに柳の芽

大阪市

多田 富士

停年の今日より嵩の高いこと

同

寝たきりの中風桜を孫に聞き

大阪市

鈴木 生仏

アベックの傘は濡れてもライト避け

出雲市

馬路 和舟

冥福を祈る同窓会の酒となる

大阪市

川口 弘生

法要へ御布施はずんで足しびれ

同

老父母に送金出来る今日の幸

神戸市

西本とら恵

米転は名のみ僻地の支店長

島根県

藤間 由起

住みなれた土地近代化にのまれ

大阪市

林 富士

投句に選句に便利な

川柳雑誌社特製

投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴)三〇円
送料(一冊分)二〇円

私の手帳から

川柳家は旅好き人が多い、日帰りの旅でも、心を楽しませてくれます。新緑の奈良は、殊に霞乃先生の好まれる所です。富柳句会の指導者八木摩太郎氏夫妻も、地元堺市のお世話、当編集部のお世話と多忙の中を縫って、さかんに旅を楽しまれておられます。

編集部は、皆様の便りを山積して、一人ひとり、しのでおります。新婚、出張、いで湯、花見、会議、見学の旅、その絵葉書のいろいろは、緊張した多忙の空気をやわらげたのしませてくれます。しかし残念なのは、差出し人の名を忘れたのをいたたく時です。雅号をちよっとお書きそえの上、面白い使いや名吟を、お寄せ下さい。お待ちいたしております。



私の或る日の体験談

・特集・

- ① あなたの或る日の体験談について、いつ、どこで何がありましたか。
 ② それは今も生かされていますか。それに關した句がありましたら二三あげて下さい—というアンケートに答えていただきました。

(編集局)

或る談判

後藤梅志

「勤皇まこと結び」という右翼があった。

大東亜戦のさなかである。

党首〇〇は株屋の外交あがりだが、弁舌さわやかな、愛嬌のある、或る意味で人望もある、才物。借金の際は定評があった。

私は、戦争の始まる前、或る親友から折入って相談をうけた。其の友人が経営する林業会社の専務をやって呉れぬか、というのである。「実は、持ち山を元幹部社員に取られかけている」助けてくれという。山林は大和の奥で三千町歩。二百年生のモミ、榎を二萬石ほど切出して山元へ積んであるが、一べんやまを見てくれとも言う。早速やまへ行つたところ高野山から七里もあり、林道から山元へ至る間には、「△△亜細亜林業」と標示した大そうなくいを十本余り打ち立て、一見して、取られかけているのが判った。

そこで私は専務を引受けることになり、金もいるしということ、六十万円前記山林を担保にK銀へ借金を申込んだ。

ところが銀行で話している内、この山は△△から山林を抵当に四十万円申込みがあり、もう出すことになっているという。びっくりしたが、この方は待ッタをかけて、

私は△△の事務所へ出掛け、社長に会ったがこれが、〇〇党首であった。

もし、私が前から〇〇と知り合ったら、ころりとやられる位巧妙な相手の出方だったが、何しろ詐偽未遂でもあり、私は有無を言わず山林担保を取下げの話をつけた。

私はこんな談判は、相手の腹の中へとび込んで話をつけることに妙を得ていた。つまり相手は悪人かどうか。場合によっては許さんという物騒な決意で当たっている。人間はいのちが惜しいというのが弱点である。この事件はあん外無事に済み、銀行も粋を利かし両方へ出すことを承知した。今なら四五億の大金。若しこれが初対面でなかつたら、思切つたとも言えず、話は徹底しなかつたらうと、思つたことである。彼も資金源の一部として、一度は利用した訳だが、中途で挫折した。この男は其の後、当時評判になった常陽銀行の融通手形をもつたまま、東京で車中頓死した。因果は恐るべきものである。

梅志

禁煙不断行

長野文庫

私は何回となく禁煙をして見たが、いつも何日目かに禁を破つて

しまふ薄志弱行の徒である。去る五月一日に何十回目かの禁煙を始めたが即日中止せざるを得なかった。と言う訳は、その日「今日から絶対に煙草は吸うまい」と決心して兎に角午後三時頃まで一本の煙草も喫わなかつたのである。勿論喫いたい気持一ぱいなのだが辛抱していた。

ところが意地の悪い日は仕方ないもので、折角昨夜から二十時間近く我慢していたのが水の泡になった。それは私が聊か尊敬している知人がやって来て色んな話をしてる内、煙草を一本所望されたのである。ところが丁度禁煙第一日のことで一本の煙草もない。正直に「今煙草が無いのです」と言えば済まないことはないが、自分が喫わないから人に喫わせる煙草がないと云う理屈は成りたない。殊に昨日まで煙草を盛んに吸っていた自分が今日から突然煙草を止めて煙草がないと言う正直な事実が妙に気が咎めて、「丁度煙草がなくなつたので、今から買に行くとところである。ちょっと待って呉れ」と言い捨て、煙草屋へ走り行った。勿論これで禁煙は中止、相手に一本を献上したあとは全部喫つてしまふ更にその後も買いつけている。

T准尉を憶う

森本法泉子

応召中勤務していた鳥取部隊兵

器委員事務室に、T准尉がいた。絶対困つたとは言わぬ人だ。いつも、面白い面白いの連発だ。

敗戦の色いよいよ濃やかな十九年の秋の或る日、彼は二、三日米私と共に徹夜して作った某作戦部隊の兵器配当表をもって、高官連の待機している会議室へ入つていった。会議は最中と思われる頃突然私の控えている次の部屋に出来た時、私は全くドキッと来た。「森本！面白いぞー」、彼の第一声は常とかわらなかつた。続いて、「面白いよー、この表は間違つていふんだー、面白いなー」あれから廿年経つた。三年越し入院の妻を抱えて私には、困つた、困つた、の連続だった。私はフトT准尉を思い出した。そうだ、そうだもの苦しむことだ、と心にきめた。それからの私は毎日面白いぞ、面白いぞとつがやき乍ら、病人や家族を励まし続けている。

武部ご夫妻との別れ

早川清生

淀川支部では眼疾のため帰省し

岐阜県出身のT准尉はそんな恬淡な人だった。自ら鍛造した短い軍刀を、腰にぶちこんで、独特の敬礼で部下を微笑まっていた准尉殿は、いまでも郷里で御健在のことと思う。

昭和二十三年五月十一日午前十

直原 七面山

あの子を死なして

恐縮ですが、田舎から大阪市安堂寺町一丁目のある米屋に奉公した私が、大阪の地理や言葉にも大分馴れて来た昭和十六年の秋でした。玉出のお得意先へ四斗の米を配達するため上六の交差点へさしかかった時のことです。丁度信号が黄に変わったがまだ大丈夫だろうと思つて、サドルから尻を上げてベタルを踏む足へ力を入れたとたんハンドルがグラグラとして交差点の真中へ横倒しに倒れてしま

いました。見れば袋の紐がほどけてあたり一面お米だらけです。電車も自動車も進むことが出来ず全部立往生です。罷を生やした交通巡査が飛んで来て呆然としている私を頭から怒鳴りつけました。私が飛散った米を手で掻集めて袋へ入れ始めると、怒鳴っていた巡査も仕方なく手伝つて入れてくれましたが、大阪の交通機関を一刻マヒ状態にしてしまったのですから全く冷汗三斗の思いでした。

それ以来、信号は慎重すぎるくらい忠実に守ることにしており、現在でも踏切の警報ベルが鳴り出すと、汽車はどんなに遅くてもジツと通過を待つようになりました。シシナルの青が待てない日本人 紫光

死んだ子の名前を口にしない父であります。

一合掌

犬を連れて

田中 烏雀

時二十分頃、津山駅前今津屋橋の橋上を走る人力車の中で、私は愛児信幸(長男)をこの腕に抱きながら逝かせてしまつた。目指す病院(入院するための)へは後わずか五分位の距離だった。以来、その時の悲しみを私は忘れない。その日は丁度長女誠子が生まれて七日目であつた。

父の名と私の名を一字ずつとって名付けてやつた信幸。

その子もすでに亡い。死ぬ十日位前、柳友福島鉄児氏の来訪に対して、七面山は留守だよと云つて、小さな胸を誇らしげに張りながら応えていたと言ふ信幸。

丁度六才であつた。七面山留守だよと吾子胸を張り葬式の日には朝からしとくと雨が降つていた。

午後二時出棺。葬儀の列は雨の中を墓地に向かった。

二階の窓からそつとのをぞいて、あふれ出る涙を拭きもやらず一人淋しく見葬つてやつた私。傘さして淋しく行つた子の慟あ、あれからもうすでに十七年が今経とうとしている。

逝きし児の墓石の雪を払うてみ

以来私はいまでも

一九五一年三月八日小犬を貰つて、朝夕散歩の相伴をする運命とはなつた。犬は主人の顔を見ると生理的現象をおこす。小便には幸い日本には、たとえコンクリになつても電信棒が林立しているからよい。つぎにうんこである。これは八分三十三秒行くと催す。うっかりすると投書夫人の睨んでる面前で開始されるから、急いで砂利や雑草やごみ等がある絶好の場所へ走る。一九六五年の老人の日も尚続けられている。

朝の坂を駆けおりた大片足をあげ慕うて呉れるのは犬だけの男となる 白史 衛星の衝突犬が小便している 烏雀

誕生日と命日

渡辺 曉童

仕事の関係で学校教育に社会教育に良く名士の講演をきく役得に接します。某月某日M先生が最近の流行の誕生祝いとともに先祖の忌日の祀もあわせてやつてはというのがピンと来てさっそく家族の誕生日と先祖の命日を一月から月を逐つて一覽表にしてみました。その日に当たる時は誕生日も忌

日もまず仏壇へ菓子、果物の類を供え季節の馳走を作つて栄養を取つています。先祖崇拜と食生活上に役立って数年来欠かせない家庭行事になりました。

千里眼

川岡 靈眼子

霊感のみでナリワイとしている千里眼は全国で男では六人位多いわかれていて、むしろ女の方が多いのかも知れない。下手ながら川柳をやる千里眼は或は日本で否世界で私一人かも知れない。川柳は誰でも進められ、また語れるが千里眼透視は無暗矢鱈には語れない。そう……昭和三十三年七月二十五日諫早未曾有のあの水害の前日、私はある用件のため佐世保行き自動車に乗つた。真向かいに坐つていた中年の男を覗くと死相がありありと現れている。尚一層私は念のため私独自の鑑識法で彼を試みた。目を下方に伏せて、急に自分の頭を相手の真向に顔の上に挙げて一瞬相手の顔を凝視した時その見られる側の人の顔が真黒く見えれば近く死ぬ人だとの現象であるとの基本がある。勿論霊感者の見立て基本である。私は途端にじつとしていられずその御人に生命の危険を告げたが、その御人は「私は至極元気でそう容易く死

ねませんよ」と言つて不服そうに言われた。私は救いの親切気に言つた事が反つて相手に限りない不快感を与えてしまつたらしい。私も吾ながら咄嗟に出た言葉を今更に後悔した。そして向かいに坐つて、居たたまれず遠くの別な椅子に席を自ら換えた。彼も諫早のある商店の主人で親しくはないが顔見知りのあつた御人なので後日知人にこの失敗談を語つたらその人は驚いて、その御人は今度の水害で流されて水死されたと言う、私の言葉は適中したがそれから御訊ねごとに際し相手は願つて申し出ない限り生命の長短は語らぬことにしている。

趣味のきもの



高橋 操子

岸和田市野田町一七五 TEL岸貝局②六六三一



川柳太平記 (六)

富士野鞍馬

楠公 (上)

多門丸

「日本外史」には「楠氏、本姓は橘氏。敏達天皇より出す。天皇の曾孫を諸兄と云う。左大臣となり、姓を橘と賜りぬ。橘氏の後裔、或は降りて民間に在り、其の河内に居る者、楠を以て氏となせり。楠氏は始めて後醍醐帝の時に著われぬという。」

とあり、その河内の豪族楠正遠の子が正成である。志貴山、毘沙門(多門天)の申し子というので多門丸と名づけ、長じて多門兵衛と称したといわれている。川柳もそれを知っている。

中子は智勇を兼し楠子也

(六六三二)

智仁勇さずかり給ふ多門丸

(六六三二)

本地は毘沙門垂跡は多門丸

(九二二七)

毘沙門の化身で多門兵衛なり

(安六桜4)

菊の紋多門の頃も小手がきき

楠氏の家紋は菊水であった。それでまた、

菊水を染めた日本の知恵袋

(九二二七)

と正成を詠んでいる。

—天皇の夢—

正夢を後醍醐帝は御ろうじる

(四三三六)

名木を後醍醐帝は一本持ち

(天三満一)

元弘元年(一一三三)後醍醐帝が、北條幕府軍に追われ、笠置の行在所に居られた時、「大きな常磐木の南の方に出た枝がごとくに栄え、童子が現われて、御身をその枝の下の方に向いた座におつき遊ばせと云った」という夢を見られ、「南の木」即ち楠の名を思われて、楠正成を召された。(太平記)この時正成三十八才であった。

楠へ勅使しらしら明けに立ち

(明二仁一)

楠はつくりの方へ御味方

(四七三)

南朝の石すえ動きなき名字

(五一五)

楠はつくりの方へひいきする

(一一二五)

花は咲かねど楠は吉野方

(八一四)

南朝へ枝葉もかたく参入し

(拾六二)

みんなみへさし出た枝でふせくなり

(安四宮二)

と川柳に詠まれている。後醍醐帝は南朝である。また、

樟脳に成ても楠は内裏守護

(一〇九五)

と楠を樟脳に帝を内裏離に見立て

ている。

かくして正成は帝を守護した

が、

笠が破れて後醍醐も袖の雨

(一三八八)

頼む木のもと雨のもる笠置山

(八一五)

笠置は幕軍に落され、天皇は、

正成と打ち合せてあった通り、

金剛山へ徒歩で行かれる途中で捕

えられ、翌元弘二年(一一三三)

三月、隠岐へ遷幸となった。

正成は、赤坂城に拠って、幕府

側の足利高氏の大军と戦ったが、

金剛山へ退いた。

赤坂の妙計

赤坂城の正成は、城兵の一人毎に、長柄の杓を持たせ、熱湯を敵にあびせかけた。と「太平記」にあるが、それが人糞を沸かしてぶつけたと、おもしろく伝えられているので、

正成は鼻をふさいでさいをふり

額ぶちの母

中村九呂平

当時妻が和裁を教えていた関係で養母がほとんど食事のことをした。私のために創意工夫をして食卓をにぎわした。その都度必ず味加減、煮込み、和え物など笑みを含めて出来栄を聞きだす。あまり頓着しない私も、お世辞にもほめなければならんことを悟った。

「今日もばあちゃんの工夫だらう、とてもうまい」と口癖のようにほめるのが習慣になった。とても満悦である。生米食わずぎらいの非常が多かった私、養母は「どうかと思つたが気に入って良かった。おかわりをあげよう」と自らサラを取り上げ、前にも増すほど盛り上げてくれる。私は好きでもない料理だが、顔に喜びを笑い、心で泣いて、さもおいしそうに二ツラも食べおえて、人知れずうんざりした。養母は本当に喜んで跡片づけもいそいそと元氣よくやっていた。それから何年かを経て養母のする料理は何んでも喜んで食べるようになった。こころは私から本当におかわりをするほどになった。現在ではきらいな物なし、何んでも食べるようになったことを感謝している。その養母も昨年七回忌を済ませた。

「お父さんは何でも喜んで食べて

くれるから大助りだ」と、このことにのみ妻は感謝している。今日も市場籠をさげて気軽に出て行ったが、何を買ってくることや、居間にかけてある額の中の養母が目たたきもせず喜んで見つめてこざる。

食べざらいせぬ食卓に皿の数

体験句に思う

高野 不二

川柳を作りはじめた五年目頃のこと、ある料亭へ公休日に遊びに行った時、公休でも帰って行く家がないと淋しそうにして居た女の身の上話を聞く破目になった事があった。貧しい生い立ちや、弟の為の色々犠牲になった話を聞いて作つた

「素顔で言う身の上話信じたし」と言う句が九州の全国大会で天位に入賞の通知を受け取った。余りの嬉しさに御札を口実(好きになりかかっていたのかも知れない)に一度呑みに出かけた。

しかし女とお客という関係で会って見るともう女の言う話も何もかもが商売上の話に聞え最初のイメージとはすっかり違ったものになってしまっていた。その後、この句と共に忘れられない出来事として心の中に残っているが女とは全然会っていない。経験を通して作つた句には思い出もあり実感の強みもあるが、うまく表現出来

(拾五) 鼻をつまんで楠さいをふり

(九一〇)

楠は鼻をつまんで下知をなし

(四四三)

風上に居て楠は采を振り

(五五三)

くその煮たまで楠は知っている

(八五八)

信玄は馬場楠は糞で責め

(六三八)

などとそれを詠んでいる。

千早のワラ人形

元弘二年(一一三三)四月、正

成は、赤坂城を奪回し、千早城に

拠って幕府軍と戦った。そうして

翌元弘三年一月には、大阪天王寺

まで進出したが、また千早へ退い

た。二月には吉野、赤坂を落さ

れ、千早に幕府の大軍を引きつけ

て、奇計をもって悩ました。その

ワラ人形の奇計は、「日本外史」

に、

「正成は、すなわち藁人数十を

作り、被らずに甲冑を以てし、

夜城下に列ぬ。兵其の後に伏

し、曉霧に乗じて大いに開せ

り。賊相告げて曰く、「城兵窮

蹙して出でて敵なり」と。挙

軍競い進む。わが兵は廻る矢を

発し、すなわち退いて城に入り

ぬ。而して敵、藁人集れば、

すなわち巨石すでに其の頭を砕

き、立ちどころに死する者五百

人。賊敢えてまた城にせまらざ

るなり。」

と書かれ、川柳もそれをおもしろ

く詠んでいる。

神代にもきかぬ千早のばかりこと

(七二三〇)

兵糧のからを楠武者にする

(四二四)

わらでなばた武士を出すひとい事

(安四智四)

古型めがと千早の寄手いひ

(九一四)

楠はたてかけて見ておかしがり

(拾五)

翌日の朝いるのと千早わら細工

(七二三二)

南朝は藁でたばねた武者も出し

(二六三)

楠はわらで寄手をなまこにし

(八一三)

正成は後で草鞋にしりと下知

(八一二五)

楠は後でわらじにしりと下知

(一三七七)

楠はしかけとほめる軍をし

(拾五)

珍らしく千早へ寄せてはかにされ

(安五智一)

木と藁は和漢二人の知恵者なり

(三六四)

等々。もう一人の知恵者というの

は、漢の諸葛孔明で、兵糧を運ぶ

のに、材木で木牛流馬をつくっ

て、容易に困難を克服した故事を

詠んだのである。また案山子に見

立てて、

百姓のするわら人形もはかり事

(七二三二)

とも詠まれ、この奇計を「正成の

案山子戦法」といわれている。

— 建武中興 —

元弘三年(一一三三)正成が、

金剛山の千早城へ幕軍を誘致集

ませてあしらっているうちに、諸

国の討幕勢力は盛り上った。

楠に歩三兵にてなぶられる

(拾五)

楠に花の咲いたる千早なり

(八一八)

千早も菊で七百騎をたもち

(一〇四八)

「菊」は正成の紋菊水と菊慈童を

きかせ、その七百才の長寿と湊川

へ出陣の七百騎とをかけた句であ

る。

その間、閏二月、後醍醐天皇は隠

岐を脱出され、伯耆の名和長年に

迎えられて、船上山にこもられた。

船の上名和と程よき締めくくり

(一五一三)

と川柳も詠んでいる。

そして五月には、足利高氏が寝

返りうって、六波羅を攻めて、北

條幕府の関西主力を落し、新田義

貞が鎌倉を陥落した。六月五日に

天皇は京都へ入られた。

論功行賞には高氏を第一とし、

従三位武藏守参議となり、天皇の

御名の一字を賜わり、尊氏と改名

した。新田義貞は従四位越後守兼

上野権磨介武者所長官となり、楠

正成は河内守。名和長年は伯耆守

ということであった。翌年一月に

建武と改元されたのである。

ない事もあって苦勞させられる。苦勞がいい句を作る為に大いに必要な事なのであるが。

尊い体験

八木摩太郎

私が十四、五年前から本社の編集を手伝う事になった。編集の経験は無し、心に自信はないが、教わる気で、編集室の人となった。組見本、組込み、字数計算、字数指定等、ほつ／＼教えてもらった。

今朝あった記事も明日掲載される場合もあり。思わぬ記事で人に迷惑を掛ける場合もある。編集の責任や、字数の少ない川柳句の編集、一字で意味が変わる微妙な仕事である。今では編集と言う事が漸くわかるような気がする。他から執筆を頼まれても、以前のような事もなく自信が出来た。これは尊い体験であり、私の一生の大きな収穫だ。

師の言葉噛みしむほどに煩がぬれは本社に於ける私の拙い選者吟である。

スキ一の盗難

小西雄々

一昨年の一月二十六日、大山のスキー場で滑るだけ滑り友人と二人で食堂に入った。軽食をとったあと、外に出てみると軒に立てかけておいたスキーが無い。僅かな

不注意のため盗られたのである。全く暗然とした。翌二十七日は休暇をとり、盗まれたスキーをさがすため再びスキー場へ行った。然し友達が「行っても無駄だ」と言ったとおり、芋の子を洗うように賑わうグレンデの中で、たとえ私から盗ったスキーで滑っている人がいても、それをさがし出すことは不可能であった。

あきらめて帰るため、精神的な疲れも加わり重たい足をひきずるように夕闇せまるバスの乗り場に来たとき、大学生風の若い男が、昨日まで私が愛用していたスキーを担いでいるではないか。あとは説明する必要もない。スキーは私の手にもどったのである。其の後家から一歩外に出て、自分の荷物を手から離すときは、何時、何処でも自分の目の届く範囲内に置くようにしております。旅行中の網棚の荷物も同じことが言えますよう。

網棚の荷物へ居眠りしておれず
(この稿40ページへつづく)

ご希望の方は
バックナンバー
川柳雑誌社
サービス部へ

方圓帳

北川 春 巢 選

岡山県 直原 七面山

旅しがるわけは美人の妻が居り
風邪引いていますと女咳いて見せ
会計を下戸に任せて酔いつぶれ
春の海どこかで心中あつたらし
口に釘ふくみ日曜大工さん
飲めるだけ飲めと斗樽の鏡抜く
迎えてくれるはふるさとの山と河

大阪市 西 山 晃

無茶苦茶な世間を憎みきれずいる
ほろ儲けより寝ころんで本を読も
人並みに花見などして風邪を引く
ペン先で燃えのこる詩を攪きたてん
青春のまだ尽きざるに禿げにける

大阪市 福 島 正 則

僻地から来ても大阪淋しがり
もう美容体操実施遊ばさず
引っぱって隠す気のない膝小僧

ラッシュアワー死者が出るまでほっておき
おもろない時間ノートへフケ落とす

松山市 月 原 宵 明

兄弟の誰も位牌を受け継かず
伏字ある伝言板も春なれば
二人ずついる景ビルの窓からみ
役人の子で出生地みな違い
日記帳途絶えて心の疵深し

児島市 本 田 恵 二 朗

優雅なるビジョンは虹の色で描き
出合いはドライ別れはウエット
ころびつまるびつ真理への道遠く
いつわりの愛語はピンクの色である
早やばやと汗もを出して孫育つ

新居浜市 小 林 孝 正

根性があつて会社が又変り
不幸な話聞いた日晩酌やめて寝る
左前だけがおんなの女史であり
盃に今日の亀裂を伏せて寝る

枚方市 宮 川 珠 笑

二人目はもう胎動も騒がれず
にごつたら濾して使えと水道課
ご先祖にお尻を向けて飲む法事
灯明が通夜の雑魚寝へ消えている

和歌山県 山 本 定 男

下手くそな琴へも桜散りはじめ

いい年をしてと云われる年になり
送られて来たゼンマイへ高くつき

肩書きが能書のような名刺刷り

奈良市 村 上 春 己

満ち足りる生活断食寮で死に
臆病な娘を青春素通りす
アイシャドー落した顔を誉めてやり
月一で貸しまししょうかとお手伝

倉吉市 奥 谷 弘 朗

老いぼれて誘惑からも見はなされ
窓越しに小鳥も春の色で飛び
努力より弱虫運を大事がり
気狂いにも鬼にもなつて芸の虫

鳥取市 近 藤 秋 星

逢いに行く初鷲を聞いた朝
奥さんの顔を拝みに来たと飲み
福祉国家いつの事やら鍛振う
病人の眼には哀しく陽が翳る

今治市 越 智 一 水

緑緑僕の疲労を直すもの
花疲れ着物も足袋もぬいだまま
怪我をしたことから直る夫婦仲

大阪市 森 川 す み れ

花びらも散らず造花の無表情
春雷が女心をまどわせる
わびしさは踵の取れたハイヒール



小松市 関戸 宗太郎

拝観料取って国宝修理中

駐車場が満員スケジュールが変り

うどん屋の出前ごときにのしられ

守口市 橋本 雅 巢

久しぶり訪えばやっぱり火の車

一泊の旅もせかせか子煩惱

進学や入学や四月の金が要り

大阪市 今西 章 雅

自衛隊大元帥をなつかしむ

P.T.Aの役受け奥さん飲み始め

丹頂鶴ソ聯生れの赤い帽

鳥取市 鈴木村 諷子

法律も後家は特別かわいがり

春うらら猫もテレビも恋をする

倉敷市 水粉 千翁

清貧に馴れてわが足音高し

一步ずつあきらめ切れぬ道遠し

制服に包んで包み切れぬ春

京都市 大久保 和三郎

良心が手足まといとなるあせり

満ち足りて火中に栗の夢を選る

夜の仮面はずしてママとなるベット

名古屋市 花東 千久良

有刺鉄線に縛られて地所売れず
家格と金でとにかく息子は大学出

愛着へ齡の差忘れる老け粧り

玉島市 井上 旭 峯

一周忌親父の酒を泣き笑い

玄関を塞いで暮れる乳母車

ゆっくりも出来ぬとたまに来た親父

熊本県 有働 芳 仙

今宵も窓から孤独を招き入れ

キャンパスへ八頭身は無視される

大阪市 福井野 迷路

金ですむことならだけは余計なり

どなり込み怒っただけで筋ほやけ

大阪市 西本 保 夫

依頼心撲滅持論ままならず

障子ポロポロつつ抜けの叱る声

香川県 三井 醉 夢

四月馬鹿かつがれてやる母の幸

おぼろ月ゆく春惜しむ照らしよう

宿毛市 渡辺 伊津志

春灯下吾が白髪に妻の愚痴

晩春の岩奪い合う波しぶき

金沢市 根上 杏 花

孫連れて未だスネかじる気で戻り

方便のうそにお寺はやしなわれ

大阪府 河本 雪 男

また明日という日があって抄らず
不況風背伸びした足すくわれる

出雲市 竹内 李 朋

東京市 描

地下鉄を出れば東京狂詩曲

西銀座マダムが急ぐ江戸小紋

大阪市 今井 章 子

床の間に桜窓には雪が降り

燃えたまま椿諦めたように落ち

岡山県 牛房 謙 士

レース玉女の膝をころげ落ち

ポリュームのおんな食欲から論じ

岡山県 永宗 宗 義

春の陽を背一ぱいに二人の詩

目に青葉觀光バスの唄が行く

加賀市 大山 雅 城

名の売れることなら一役買うつもり

派手ながら手描きの帯をいつまでも

京都市 室井 八九 寸

礼状を毛筆にしてひまかかり

テッチリ材料さけて孫を訪う

大阪市 谷本 溪 湖

一張羅を着てメーデーの列にあり

観光は鈍行商用は超特急

七尾市 松高 秀 峰

折角のパナナ歯にしむ老の口

神戸市 吉田 隆 史

或る団扇句の系譜

——「団扇では憎らしい程扣かれず」の考察

阿 達 義 雄



(一)

「川柳」と呼ばれている句の中に、俳諧高
点附句集や雑俳系の前句附の勝句の中か
ら、其の儘又は多少改められて取られてい
るものが多いことは周知のことである。

これ等の「川柳」の原形と認められる句
の最も古い句がどの時代迄溯って見られる
かということ「川柳」の源流を考える上
に重要なことであろう。

川柳点の発生は、柳味のある句が何時頃
から現われたかということ、その中核とな
って言語形態の上から見て、原形をそこ
なわれずに、幾度かの改変を受けながらも
遂に川柳として定着した取込川柳の生成を
考究する必要がある。

取込川柳とは、川柳点より以前に、他の
前句附の附句（五七五）として既に存在
し、先ず川柳評万句合に取り込まれ、更に
「柳多留」にも収録されているものであつ
て、これらは一般に嵌句、焼直しの句、改

竄句、模倣句などと称せられている創意の
ない句の類であるが、反面から考えるな
ら、幾人かの評者によって、捨て難い句と
して採られたものであるゆえ、駄句が少な
く、中には二、三回の影塚を経た結果佳句
となっているものが多い。

又、これらの句が川柳点として取り込れ
たために、川柳点の生成に幾多の刺激を与
え、その地位の強化に及ぼした役割にも無
視出来ないものがあるように考えられる。

取込川柳の中には、単なる盗句、焼直し
に過ぎないものも多いが、これらのうちに
は、幾度かの改変による原句の生長を語
り、それが或る個人の創作ではなく、史的
産物なる所以を暗々裡に示しているものが
ある。

(二)

この様な取込川柳の典型的なものは、
「団扇ではにくらしい程たかれず」の一
句と、その変遷の痕跡であろう。

先ず、この句の発生と転々の概況を一瞥
してみるに、その初発は元祿十四年の上方
版の雑俳撰集「俳諧寄太鼓」と「替独楽」
であり、その後暫く典籍の中に眠っていた
が、宝暦期になり、万句合興行の盛時にお
よび、宝暦十一年に乱狐評万句合に取られ
たのを初めとし、宝暦十二年には川柳評万
句合に採られ、次に翌十三年には若翁評万
句合にも採られ、明和二年「柳多留」初篇
の刊行にあたっては、吳陵軒可有によって
この中にも採択されたものであった。

明和七年に至って、川柳評万句合に少し
形を変えて勝句となったこの句は、今度は
その儘「柳多留」七篇（明和九年）に収録
され、更に安永五年の川柳評万句合におい
ては、宝暦十二年の時の句が再び採られ
て、それが「柳多留」十四篇にまたも収め
られて、前後都合、川柳評万句合にも
「柳多留」にも、それぞれ三回ずつ採られ
たことになる。

一方、この句は、当時の俳諧高点附句集

たる「武玉川」十七篇にも収められている
が、これは安永二年の刊行であるから、寧
ろ、川柳点の影響によるものかも知れな
い。

最後に、寛政八年、これが「古今前句
集」に収められ、最終の定着した句となっ
ている。

これらの一書毎に、一評者の選眼によつ
て、この句が佳句と認められたとすると、
この句は累計十二名の評者によって佳句と
された多評通り句だということになろう。

このことを考えてみると、たとえ、取込
みの句であっても、この句は川柳点の代表
的な句と言っても過言ではあるまい。

(三)

以上は、句の形の改削を一応棚上げて
述べた推移の大概に過ぎないので、次に、
少し具体的に述べてみると、元祿十四年に
出された「俳諧寄太鼓」「替独楽」は共に
京都菊屋七兵衛等の板になる園女・米山・
由平・文流・団水・才麿・雲鼓・只丸等
の前句附笠附との勝句を集めた雑俳撰書で
あるから、ここに収められている句は、大
体において上方の前句附の傾向を示してい
ると見てよからう。

この書の中に

ぬらりくらりとく

団では思ふようには叩かれず

の前句附のあることを最初に指摘されたの
は、故頭原博士であった。

この句において、私の注意したいのは、前
句と照し合わせても分るように、団扇が主

題となっていて、人物についての措定はな
く、句中の人物は誰でもよかつたというこ
とである。

然るに、宝曆十一年十一月十三日開の乱
狐評万句には、次の様になつており、必ず
しも「替独業」の中の附句を剽窃したとも
断ずることは出来ない。或はこれは、困扇
で叩くことを詠んだ江戸的な最初の発想で
あろう。

困扇にて敲くハ憎ふない男

柴井町 柏木

前句題は照合符号が明確でないが、「見
合せにけりく」と推定される。

乱狐点においては、明らかに若い女性の
動作と心理とを客観的に考察した句となつ
ている。

さて、それならば、同じ江戸で翌宝曆十
二年の川柳評万句合に現われてくる。

うちわでハにくらしひ程叩かれず

「前句題」りきみ社すれく

神田 名月

右の句は、上方前句附を粉本としたもので
あろうか。それとも乱狐点に拠つて改作し
たものであろうか。

もし、右の川柳点が乱狐点の改作による
ものだとすると、乱狐点で若い女性の動作
と心理を洞察して詠んだものに対し、川柳
点では、若い娘が若い男に何かからかわれ
て、「まあにくらしい！」とでも言いなが
ら困扇で叩いている情景を前提として、川
柳子が軽く挿した句となり、西原柳雨

「柳多留初篇講義」にも記されている様に
「涼台などで、よい仲の男女が痴話狂つて

いる場合」と見られ、ここに至つて、困扇
を持つてする媚態の情景が点出されると共
に、乱狐点の可笑の考察句が、今は軽い挿
揄を伴つた錦絵の様な風俗吟として転化さ
れたことになる。

従つて、この句が其儘「柳多留」初篇に
佳句として収められたのであろう。

然るに、この句は次の様な前句題の附句
として、少し改められて、神田の梅連によ
つて川柳評万句合に取次がれ、「明七・仁

3」に採られ、更に其儘「柳多留」の「七
・37」に収載されたのであつた。

うちわでハ思ふやうにハた、かれず

「前句題」わらひ社すれく

神田 むめ

これは、媚態の消失であり、若い娘の語
気の連想の後退であつて、必ずしも若い二
人の男女の場合としなくとも、前句題にも
附き得るものである。

又、安永二年刊の「俳諧武玉川」十七篇

には、

困扇ではたたきたい程たたかれず

(武一七・9)

となつて、江戸座俳諧の高点附句としても
採られているが、これも普遍に通ずる句で
あつて、若い男女の痴話狂いとか、女性の
媚態として限定することは出来ない。

これすなわち、「安五・礼一」の川柳評
万句合にも一度宝曆十二年の句に復元し
たものを勝句とした所以であり、「柳多
留」(安永八年刊)の「一四・17」にもこ
れを収載した一因でもあろう。

うちわでハにくらしい程た、かれず

「前句題」ならひ社すれく
山下 さくら木

右の前句題が「習ひ社すれ」か或は「並
び社すれく」とのどちらなのかを、他の
附句によつて徴してみるに、この頃の句は
既に殆ど前句題に拘泥せず作られていたこ
とが知られる。つまり、この頃には、当初
から一句立として詠まれていたのが多かつ
たということである。

初代川柳歿後六年の寛政八年に編纂され
た「古今前句集」は単に川柳点の前句附ば
かりでなく、宝曆以降の前句附にして、附
句だけでも独立して鑑賞に値する句を類別
した大著であるが、この書の編者は、以上
挙げた各種の「困扇で叩く」の句の中か
ら、安永川柳点の

困扇ではにくらしい程た、かれず

の句を採つて、ここに収め、この書は享和
元年に「柳梅拾遺」と名を改められて刊行
されたものの、其の「第八上 恋之部 安
永」の所に見られる。然し、これは宝曆の
所に置かれるのが至当であらう。

又、この句は先蹤句に拠つたものとして
見れば見られる取込みの句であるが、その
文芸的価値から言うならば、確かに川柳点
としての独自性を持っているものであつ
て、柄井川柳、吳陵軒可有の両者に愛好さ
れた句であつたことが知られる。

しかも、これは時代を異にする幾人かの
評者によつて佳句とされた多評通り句であ
り、少なくとも、江戸時代にあつては、高
点句的なものと考えられていたと思う。

川柳評万句合の高番句は、必ずしも、そ

の文芸的価値を基準として評価されたもの
でないから、我々はこれとは別の見地か
ら、当時の評者一般が佳品とした句を推定
する必要があるが、多評通り句も、
その一つの基準となるであらう。

筆者・新潟大学教授

飛・燕・往・来

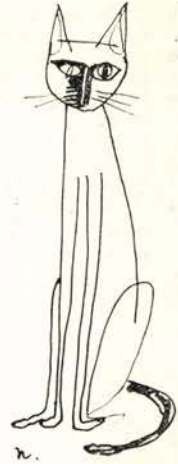
★江国幽谷氏より(岡山市)

編集部宛

前略、過日の柳人録記載の趣味はあれだ
けにしておきました。日本画もやってい
ます。彫刻のみを使って暇さえあれば色々
と刻んでいます。釣釣りはおそらく誰にも
負けません。竿もピクも皆自分で立派なも
のを作っています。沖釣りの舟も自分で漕
げます。山の中を歩き回ります。精巧なラ
ジオも組立えます。陶器集めもしていま
す。というように訳で一日が三十分間あつ
ても足りないように思われます。

色紙短冊
書画用品

大塚政一
丹月堂
おゆせにせに



お人好の川柳

日記

二 遠 山 木

(三月×日)

昨日朝から見えなくなったミケが今朝になっても戻って来ない。十年以上も一緒に暮らした仲だが、或はこれで別れかも知れぬ。今更に彼奴の賢かったこと、かわいらしかったことが、しみじみ思い浮かべられる。猫を余り好かぬ妻も矢張り心配なのか、それとも私への手前か、ミケミケと呼び乍ら近所を探して歩く。

午後元〇〇議員の武元氏が来て駅裏の土地を某工場の建築用地として譲ってやって呉れまいかと言ふ。此の話は既に二、三カ月前に同氏から下話があったもので、換地を出してもよいし、賃貸借契約を結んでもよいと言ふ。武元氏は私の最も信頼している人である。損とか得とかは抜きにして即座に

快諾す。

西郷隆盛によく似た武元氏の満足な顔を見ると、こつちもまた満足である。

お世辞ではないよ西郷（そく）に似ていることも頼もしく
今朝また武元氏が来て、工場の建築を急ぐので、昨日の話を具体的に取決めたいと言ふ。私としては

板場氏の土地を換地として貰えば大変都合だが、それが叶わねば先方が言う通りの賃貸借契約（補遺欄詳細記入）にしたい。この二つの中一つだ。その点あなたに任せするから自由に決めてもらいたいと言つて置く。

武元氏に任せとけば間違いはない。任されても困ると困つた顔はせず

米座氏から「君も推書を作つて

見ないか、コマ（椎茸の菌）と椽を用意しとくから明日取りに来い」と電話あり。米座氏は六十の輪を過ぎて百姓を始め、まだ二、三年にしかならぬのに、もう十年も前から百姓をしている言わば古参の私をチャンとリードしている。

「そら早くバセリを植えろ」「レタスはこんな場所では駄目だ」「今年は小玉の西瓜も作るがよいぞ」「老衰の桃畑は栗に切替えろ」と言う具合だ。

米座氏はなかなかの才物で私より一つ年上だが益々元氣。私は元来鈍物でぼつぼつ惚けかけている。

才物と鈍物なのにうまが合い
(三月×日)

会社は土地の契約を急いどると言うのに、武元氏は其後何とも言つて来ぬのは何故だろう。板場氏の換地に難色があるのかも知れぬ。

そうなるも世話好の武元氏のことだから他に換地を探しとるかも知れぬ。だが私は板場氏の土地以外に氣に入る土地は無いのだから、無駄な骨折を武元氏にさせてはならぬと考えて、朝早く「賃貸借と言ふことに決めたいから然るべく頼む」と電話をかけた。武元氏は「晩に行くから其の時話を」とだけで電話を切つた。

午後米座氏が「待つて居ても君が取りに来ぬから持つて来たよ」と椎茸のコマ百二十個と椽十五本を単車に積んで届けてくれた。

「面倒くさくなんかいいよ、平気で作れるさ、巻ずし、茶碗むし、生のものはおすましにもいいんだ。家で使うだけの椎茸は作るべきだ」と言う。「序でに捷平の『大陸の細道』と利支の歌集を持つて来たから読めよ」と置いてくれる。「有難う」と言うだけでいつもの通り報いるものとは何もない。

名も金もなくて心の友を持ち鈍物へ心の友が物を呉れ夜になつて武元氏が私の臆測通り他に換地を探して其の話を持ち込んで来た。

武元氏としては私が最初に換地を望んで居たので、私の今朝の電話にも拘らず氣を利かして骨折つてくれたのだが、一応賃貸借と決めた私の心は動かなかつた。武元氏には大変気の毒だつた。然し西郷に似ただけの事はあつて、さすがにいやな顔は見せなかつた。

憤つても憤つたようにならぬ顔愈賃貸借と決まつたので寛いで、形ばかりの固めの盃を二人で交し、十二時近くまでお互いの思い出話等に打ち興じ近年にない楽しい一夜を過ごしたのであつた。思い出は年経るほどに美しく
(三月×日)

朝、武元氏が来て言うことに「あなたの田の隣の亀本さんの土地を買うことにしたから、あなたの土地は後の話にしたい。だが工場は将来必ず拡張するだろうから、其時にはあなたの土地を買うようにする。だからこれで話が切れた訳では決してない。そこで亀本氏の土地へ工場を建てるについては、隣地としてあなたの同意書が必要だから、これへ判を捺してくれ」と私の名の書かれた刷物を私の目の前へ置いたのである。そして西郷そつくりの大きな目で、私の顔をじつと見詰めたのである。私も呆然と武元氏の顔を見つめたことである。

武元氏は私をお人好で無抵抗主義であることをチャンと飲みこんで居てこんな事を言うのだろうかと思つたが、柄もなく抵抗を感じそうになつたが、それよりも早く「ハイよろしゅう御座います」と口の方が言つてしまつた。でも其の時の私の顔は何れ青かつたに違いないし、判を捺す私の手は小刻みにふるえていたように思う。

己にも克てず人にも勝たず人様は賢し俺はお人好しお人好し第三者から笑われる鈍物のまっすぐ歩く他はなし
(三月×日)
小学校から「来る二十日に六年生の卒業式をするから臨席願いたい」と案内状が届いたのが昨日。

今日また校長から「案内状が届いたでしょうか、御多忙だろうが是非臨席お願いしたい」と電話が来た。御念の入ったことだ。

「ジャンパーのおっさんが来賓席へ納まったらどんなもんかいな」と言う

「川柳の縁でしょう」と妻が言った。

ほんにそう言えば、句会の際に何度か校長が臨席して下さった事がある。して見ると此の俺もジャンパーを脱いで卒業式へ出かけるべきだろうか。

ジャンパーを脱いで何事かと訊かれ大萬川柳に

おっさんと呼ばれて返事せず
しまい 栗

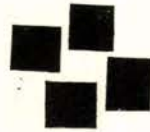
今日の新聞を見るとK市の、ある奇特な人が保育園設置費の全額七百萬円を寄付したとある。公共の為に尽くすこの人の記事を読み乍ら、私の頭へヒョイと来たのが武元氏の事である。武元氏は〇〇議員時代から現在まで、引続きわが地区の為に働いている。沢山な公共事業に尽瘁し、地区内の誰しもが多かれ少なかれその恩恵に浴している。私欲に傾かぬことも一般に認めている。思えば私の土地の件についても、わが地区へ工場を誘致する為の骨折であった。聊か筋の通らぬ仕打ちがあったとしても、多数の為に働く心は立派だ。

個人間の義理とか人情に余り拘って居ては大衆の幸福への道を塞ぐ事になる場合もあろう。

先日米、武元氏に対し心平らかにでなかつた私だが、こう考えて行く中、頭の中がスッカリ晴れ渡つたように、寛いだ気持ちになつた。

二三日人を憎んでくたびれる
武元氏は前回の〇〇選挙には惜しくも敗れた。次回には是非当選して貰いたい。当選させねばならぬ。わが地区に無くてならぬ人だ。

三月号川雑に
円満解決泣く者は泣かしとき



柳祖碑に立ちて

川岡 靈 眼子

昭和四十年三月四日、亀有駅からタクシーを走らせ、浅草雷門前で降り、観音寺見世通りの雑沓に這入った。観音様の境内の巡査検問所で柄井川柳師の墓所を訊いても誰も知らない。仕方がないので観音寺の地下事務所を訪ねたら、居合せた若い婦人が叮嚀に調べてくれた。墓は此の観音寺内には無く、同じ浅草区内の三筋町二丁目一〇番地交差点の手前路地内の天台宗竜王寺で、現任職を釈氏亮源氏という。竜王寺は小さな門の閉

まつた煉瓦塀のある寺院だった。小さい潜り戸を開き、中庭に立つと直ぐ右側の門の近くに、横に平らかな自然石があつた。木枯しや跡で芽を吹け川柳」と筆太に深く刻まれた柳祖の句碑である。立つて目の下に見られる角度で建ててある。その左手にはモルタル塗の間口四圍程の平屋があつて二枚の硝子戸がはまっている。川柳館という木札が掲げられている道場風の建物である。庭には人影がないので、台所とおほしき硝子戸をあ

けて声をかけると、直ぐ奥からこの寺の奥様らしい質素な婦人が出て来られた。後で夫人と判つたのであるが、都会の真中には珍らしい地味な方である。私は夫人に招じ入れらるるままに川柳館の座敷に入った。椽をめぐらした十畳敷ほどの部屋ごしに庭が見える。部屋の中央に広いテーブルが置いてある。此の川柳館で東京在住の柳人が例会など開いて作句道場にしていられるのであろう。正面の床間には二枚の軸がかかっている。向かつて右が柳祖柄井川柳翁の肖像画だ。左が青の布縁立立ての軸で、富士野鞍馬先生の揮毫になる「木枯しや……」の柳祖の句である。夫人のお許しを得て二三枚カメラにおさめ、些少の香料をお供えてした。線香と供え柴と樽水を持って案内される夫人について奥の潜り戸から裏の墓地に入る。川柳師の墓碑は一段と高い所にあつて低い石垣で囲まれている。その右手には由来書きの標札が建ててあつた。「享保三年（一七一八年）江戸に生まれた。浅草の名主として訴訟事にも関し、人生の表裏人情の機微にも自ら通ずるところが多く、宝暦七年（一七五七年）前句附の点者として名声を得た。辞世の句に「木枯しや跡で芽を吹け川柳」がある。寛政二年（一七九〇年）歿」とある。「苔

と私は即詠の句を墓碑に献じ先亡回向文を限りなく声高く手向けた。就終終つて墓所を降り、振返ると四角な石簷に元祖川柳翁一百回記念標、明治二十二年建」の文字が目にしみる。供養毎に建てられた卒塔婆が墓の背後に数限りない。石の名刺簷に名刺を投じ門前の庭に戻ると、釈氏亮源和尚は平装に着換えて出て来られた。十年の知己の如く心よく会釈をされる。麻生路郎師の話も出た。共に柳翁碑の前でカメラに納まる。私は竜の一笔書きの出演のため午後四時までに銀座の長崎放送東京支社に向向くスケジュールが組まれていたので、心残りではあるが、再会を約して竜王寺を辞した。

黄銅六角ボルトナット及び特殊挽物全般

合資会社

西出螺子製作所

大阪市天王寺区宰相山町 1 4 2
TEL (761) 3 4 5 2 ~ 4
夜間 (762) 4 4 0 8



一路集

選者 松江梅里
那谷光郎
内藤きさ子

ふみ台

松江梅里選

石地藏ふみ台にして垣のそき 句楽坊
 失意がふみ台になり貯めはじめ 弥生
 ふみ台に徹しきつる母の顔 判志
 ふみ台へ出世の恩を返えしに米 亨
 孫出てふみ台の角叩かれる 旭峯
 ふみ台の上で伸びてる脚線美 信二
 労組をふみ台にした出世欲 弘朗
 ふみ台にされ学歴のないひがみ 万竿
 百キロが乗ってふみ台つぶれそう 鶴丸
 ふみ台にされて不服な衣裳箱 隆史
 ふみ台に肩すかされて左遷され どんたく
 ふみ台のように便利な男が居 秀峰
 ふみ台をゆすって新妻怖がらせ 晃男
 ふみ台を踏みはずして小役人 味平
 ふみ台にされて労組腹をたて たけお
 ふみ台にされて芽の出ぬ平社員 保夫

ふみ台にする気でいたら栄転し 可住
 ふみ台の智恵を親馬鹿うれしがり 春巳
 一生を通すふみ台妻が持ち 謙士
 ふみ台の用がなければ邪魔にされ 藤波
 ふみ台にされてうれしい父の肩 井蛙
 ふみ台の不満分け前気に入らず 芳仙
 学歴にふみ台にされ平で生き 伊津志
 うなずきをふみ台にする辻易者 歌子
 この老舗ふみ台で生きた母憶う 洛醉
 ふみ台にされる取柄とも知らず 木魚
 ふみ台はまごど遊びのソットなり
 友情をふみ台にする世が淋し 不二
 ふみ台をしかり持たせている背伸び 愛鳩
 ふみ台は妻のへそくり知っており 松風
 母性愛子のふみ台になってやり 杏花
 ふみ台は無用へそくり腹に巻く 野迷路
 ふみ台にした予備校へ礼に来る 半月
 優勝のふみ台金銀銅並らび 繁太郎
 ふみ台にしたりされたり酒をくみ 古心
 柿の木の枝ふみ台が揺れて折れ 幽谷

ふみ台になる人生に悔もなく 代仕男
 乗客をふみ台にした値上げ 雄声
 ふみ台になる気の姉の嫁きおくれ 千翁
 つま先きを椅子逆らう額の位置 和三郎
 へそくりをふみ台が知る額の裏 李鳥
 ふみ台になろう初心者のびてくれ 静水
 下請けをふみ台にして更生し 与志
 ふみ台を支えてくれる妻を呼び 秋星
 棚一つ吊るにふみ台から直し 滋雀
 ふみ台の役で秒針こまめなり 光郎
 ふみ台にされっぱなしで停年米 素身郎
 人事異動またふみ台にされていた 同
 ふみ台の片脚枝にある庭師 八九寸
 ふみ台へふみ台の要る世界地図 同
 ふみ台の据りが悪い安だたみ 章雅
 ふみ台にする根性を見すかさされ 同
 愛すればこそふみ台に甘んじる 宗義
 ふみ台にせよとはご先祖のたまわす 同
 鍵っ子の或日ふみ台からころげ 惠二朗
 ふみ台になってビニロの泣き笑い 同
 ふみ台は借りるものだ困地決め 雄々
 ふみ台へ周囲気にして女乗り 同
 ふみ台にせよと先輩ありがたし 清人
 ふみ台へ寝果けまなごがけつまずき 同

佳吟

ふみ台の欲しい新妻抱きあげる 滋雀
 ふみ台にした恩人の墓に伏し 句楽坊
 出世コースのふみ台になる女 初甫
 幔幕にふみ台の要る芽出度い日 雄声
 ふみ台の上にあぐらのボスが居る 代仕男
 万骨はふみ台となり枯れはてり 深湖
 ふみ台へ上れば届く智恵がつき 幽谷
 利用価値ないのかふみ台にもされず 章雅

ふみ台になりあう仲を羨まれ 惠二朗
 ふみ台を支える妻をたよりにし 雄々
 人
 ふみ台という満足感の汗 千翁
 地
 子に夢がありふみ台の位置に耐え 和三郎
 天
 ふみ台になって女の意地を立て 宗義
 軸
 ふみ台になったが妻の座温かし

全盛 那谷光郎選

小世帯へ全盛時代の癖が出る 初甫
 全盛の過去は斯うだと屋台店 滋雀
 全盛へ養子のが気が気にかゝり 千翁
 全盛の名残りを松の声に聞く 同
 今に見ろ全盛どこまで続くやら 味平
 全盛へまあまあですと言うておく 保夫
 全盛時トツブクラスとよく飲んだ 溪淵
 全盛を偲ぶ倒れたまゝの石碑 野迷路
 全盛を孫に話して気を安め 可住
 全盛の頃を税務署もなつかしみ 同
 全盛がまだまだ爪に火をともし 春巳
 全盛の人が中心クラス会 信二
 税務署が見た全盛期ちと外れ 秋月
 お見舞の客が絶えない全盛期 同
 全盛の名残封筒古けれど 伊津志
 ご先祖の全盛墓地で子に聞かせ 静水
 全盛の頃いま耐やけの顔になし 同
 全盛の家運へ甘える脛かじり 弥生
 全盛の裏の悩みは借金苦 李鳥

全盛の調子に乗ってにくまれる 同
 全盛の頃の親類寄り付かず 同
 全盛が世間知らずの子に育て 代仕男
 新聞の悲劇へ全盛無関心 清人
 全盛を渡り廊下の艶に秘め 洛醉
 全盛を誇らしげにふしんする ろ亭
 全盛に見える月賦の自家用車 木魚
 全盛の断面爪で灯をともし 句楽坊
 全盛を語るまぶたは閉じたま、 井蛙
 シンガールおとした頃が花だった 芳仙
 警官が要る程人気が沸騰し 同
 社員まで肩で風切る全盛期 幽谷
 全盛を新聞広告一頁 同
 全盛の夢物語語り養老院 藤波
 全盛へ花嫁が来た元華族 雄声
 全盛は藍綬褒章ほしくなり 同
 全盛のむかしを今の語り種 雅城
 儲け口持ち込んでくる全盛期 章雅
 本妻も甲斐性と済ます全盛期 同
 全盛の頃に生れた不倖 与志
 全盛がかえって息子を墮落させ 鶴丸
 全盛へ牛乳風呂でみがく肌 雄々
 全盛の頃の二号に養われ どんたく
 なせばなる誰でも言える全盛期 秀峰
 全盛の頃がよかった湯につかり 同
 月満ちたと思えばすでにかげはじめ 半月
 全盛の王座所得は日本一 繁太郎
 全盛の末路は哀れ壇の浦 松風
 広言を吐く全盛へ函がた、ず 愛鳩
 記念品全盛期を想わせる 判志
 満洲にわが全盛を捨ててくる 弘郎
 流転輪廻家名が太い無縁墓 和三郎
 全盛が過ぎて夫をとり戻し 同
 ドッ廻り全盛の夢捨て切れず 万竿
 全盛の鼻息老人あぶながら 宗義

全盛を訪えば鼻であしらわれ 同
 全盛の驕り奈落へ続く道 素身郎
 全盛はさぞかしと思ううば桜 杏花
 全盛が過去を語って酒が冷え 旭峯
 浮き沈み今全盛の岸につき 同
 全盛を誇った髭髯も今は剃り 古心
 全盛へ後を絶たない贈り物 秋屋
 全盛の今も変らぬお人柄 同
 全盛の蔭にライバル妬心研ぐ 十九平
 全盛をオポチュニストに茶化される 同
 全盛を花にたとえて噂され 惠二朗
 全盛のやつぱり葉葉服でいる 同

佳吟
 記録をのこし横綱番を切り 味平
 全盛をまだ忘れない愚痴に暮れ 可住
 全盛は悲しき起てる児を知らず 八九寸
 全盛の人氣がゴシップ否定せず 井蛙
 全盛に終止符うったどら息子 藤波
 全盛をつづけるための子を生まず 雄々
 全盛へバトンタッチの子の不肖 どんたく
 全盛は夢しか無かった小役人 弘朗
 全盛になるとやつぱり二号持ち 古心

秀吟
 葬列が長々つづく全盛期 秋月
 全盛に生きた姑の愚痴多し 代仕男
 全盛であった屋号でまだ呼ばれ 木魚

軸
 世を嘆く全盛時代の鬼がわら

線香

内藤きさ子選

客も去り線香の灰も片付けぬ 与志
 線香を絶やさず切下げ髪しづか 惠二朗
 線香が切れた仏間を愚痴と出る 宗義
 線香の煙何処かにある隙間 和三郎

京奈良の旅は線香代が要り 光郎
 線香が溶け出て奈良の春霞 可住
 線日の線香一日燃えつゞけ 幽谷
 線香をつけ替えお通夜寝るゝする 滋雀
 山小屋でたく線香へ泣くばかり 不二
 線香のニックネームを頂戴し 歌子
 墓まいり隣へ線香立て、あげ 愛鳩
 香煙を善男善女は肌塗りに 清人
 巻線香の煙りと変り不婦の人 章雅
 写経ふけて活花と線香いりまじり 八九寸
 幾条の線香魚活きる店 同
 線香のうつり香饅頭はしがらみ 雄声
 線香の匂いは今も東岳寺 同
 線香を守って老婆一人住み 保夫
 大仏の前の線香はそんゝと 同
 線香を立て、死に目に逢ふ詭ひ 井蛙
 線香が二人が、りて子を押し 同
 頼りない線香の先で煙草つけ 静水
 線香の匂い無情な部屋にさせ 同
 線香の煙りと共に考える 松風
 線香の前に香水泣きじゃくり 同

佳吟
 魚屋の線香春のハエを追う 春巳
 命日の踏切地蔵に香が煙り 清人
 線香をあげて任せてくれと云い 千翁
 経木流し線香にむせぶ亀の池 章雅

人
 線香をあげて出世を見てもらい 代仕男
 線香を手に露路折れる地藏盆 章雅

地
 線香の中でもマイク遠慮せず 信二

天
 香煙のとゞかぬとこで泣く二号 清人

軸
 中継の流経線香匂いそう

柳志寸言



本多柳志

◇歎異抄に「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」と云う詞がある。この頃やつとこの意味が判つて来た。悪人の自覚がついた訳であらうか。

◇東京五輪映画が余りに芸術的すぎる、と云う非難が一部の人々の間にある。川柳の場合には余りに記録的にすぎると、一部の選者から嫌われる様である。

◇千何百年も前の種から、古代のハスの花が開いたそう。種のもつ生命力の不思議さには、唯々驚かざるを得ない。所で吾々の川柳のもつ生命力を考へる時、いささか淋しくならざるを得ない。

◇人間の幸福は立派な葬式を出して貰えるか、どうかと云う事で、最終点に決まる様に思う。のみ喰いに千金を投じ、橋を立べ立て坊主をたくさん呼ぶ事が、立派な葬式と云うのではない。

◇人間の驚きには、無智なるが為の驚きと、有識である為の驚きとがある。驚くための知識を広くもちたいものである。

盃を挙げて天下は廻りもち

周魚



きやり45周年周魚喜寿記念句碑裏面(村田周魚先生は本名繁助、明治22年下谷車坂に生る。川柳に志してより50有余年その開川柳きやり吟社を興し遠く海外にまで斯道の発展に尽くす。社人その徳を慕いて、この碑を建つ。昭和32年吉日)

柳界展望

句会

▼本社六月句会は七日(月)午後六時から千日前電停東入る自安寺で開催。柳友お話し合わせの上多数のご出席をお願いする。

▼七面短詩型文学クラブ川柳部句会(和歌山市)は五月十三日(木)午後五時から北ノ新地朝千鳥で開催。

▼コクヨ川柳会(大阪市)五月句会は十四日(金)午後六時からコクヨ株式会社社上で開催。

▼南海電鉄川柳会(大阪市)五月句会は二十日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。

▼大阪通信病院川柳会五月句会は二十九日(土)午後二時から南館

一階別室で開催。

▼川雑岡山県下各支部連合吟行句会は五月十五日湯郷温泉ホテルたかくらで開催、本社宛寄書を寄せられた。

▼川雑備前支部(岡山県)四月例会は二十四日横山一声居で開催。

▼川雑篠山支部(兵庫県)五月句会は八日(土)午後一時から多紀福祉事務所別館で開催。

▼大鉄川柳句会京都上賀茂吟行は五月十六日(日)正伝寺へ。

▼川雑阿倍野支部(大阪市)六月句会は二十日(日)信貴・生駒吟行、午前十時近鉄上六で集合。兼題は葉桜・見晴し・虎、川雑玉造支部も吟行に合流する。

▼南北忌句会が五月一日(土)午後六時から大阪美術倶楽部で開催された。主催は川柳文学社。

▼北海道川柳社連盟では昭和二十九年年度北海道年度賞を募集している。応募は北海道在住者に限られていて各柳派の選考委員により最優秀作家一名が選出される。

▼昭和四十年年度知事杯争奪、昭和三十九年度川柳年度賞授賞、北海道川柳大会は昭和四十年七月十八日(日)正午から札幌市北六条西二丁目国鉄クラブで開催。

▼川柳北上吟社十周年記念第九回岩手県川柳大会は六月十三日(日)午前十時から北上市常盤台北上市民会館で開催。

▼故塚越迷亭追悼句会は昭和四十年六月五日(土)午後五時から東京千代田区神保町二ノ十教育出版ビルで開催。村田周魚・川上三太郎・高須睦三味諸氏が故人を語られる座談会も企画されている。

▼第十一回愛媛川柳研究大会は五月十六日(日)午前十時から今治市中央公民館で開催。

▼早川右近・中野懐窓両氏古稀祝賀句会は昭和四十年六月十三日

(日)正午から神奈川県立労働会館五階大教室で開催。兼題、右・近・懐・窓・古・稀・ますます・さかん、各題三句、投句は横浜市南区中村町四ノ二七八中野懐窓方横浜川柳社宛。

▼第三十一回京浜川柳大会は昭和四十年四月二十九日午前十一時から横浜開港記念会館で開催。

▼愛知県川柳作家協会第一回川柳大会は五月十六日(日)正午から愛知県産業貿易会館地下第一教室で開催。

▼中京物故川柳作家慰霊祭は六月八日午後六時から桜天神社社務所で開催。

▼黒石川柳社主催第二回川柳大会は五月二日午前十時から黒石公民館日本間で開催。

▼三戸川柳吟社創立四十周年松尾馬奮句碑建立記念川柳大会は六月二十日(日)割栗西村で開催。

消息

▼路郎主幹は五月十四日(金)日赤病院を退院、引続き自宅で療養を続けられる。

▼北川春葉氏(大阪市)は四月末、流感のため発熱三日間欠勤された十年ぶりの病臥とのこと。

▼若本多久志氏(西宮市)から四月二十九日、「路郎先生その後ご容態は如何ですか。小生相変らずあわただしい旅をしており、只今羽田のターミナルホテルからはるかにお見舞い申し上げます。」



時の川柳100号記念大会(神戸市海洋会館一4月18日)席上で挨拶をされる三条東洋樹主幹一寸すむ撮影

不朽の人々



鳥根黒木次可役場吏員藤井明朗氏（東京駅にて）

旅好きのプランへ妻もあきらめる

(明朗)

世話好きでお人好しで、その上旅行好きと来ているので、貧乏性は抜けきれず五十年という所です。先ず川柳と旅のプランを立てる事が毎年の習慣で、一昨年と昨年はプランどおり実現した。春は東京、夏は大阪川雑句会への出席、各地の句会への出席など、元気で飛び歩いているのが、私の健康の秘訣かも知れない。健康が自慢食之苦にならず

▼西尾葉氏（八尾市）は五月十七日堂友クラブ例会に招かれ、「川柳の話」を講話出席者に感銘を与えられた。

▼布施筑川氏（大阪市）は水らく国立大阪病院長として勤務されてきたが、五月から引続き同院の名譽院長を委嘱され同時に帝塚山病院の名譽院長に就任された。博學、経験、並びなき斯界の權威者のご活躍に敬意を表したい。

▼八木摩太郎氏（堺市）は五月九日徳子夫人同伴で小豆島へ四十年ぶりの旅をされ、今が一番佳せかも知れないと人生行路を回想された。双子浦にて「夫婦写真島のアベベが撮ってくれ（摩太郎）」「廿二十四の瞳」に馴染む小豆島（徳子）

▼清水白柳氏（大阪府）は「川柳平安」五月号に前号作品批評を執筆された。
▼魚住満潮氏（大阪市）は旅嫌いの夫人を説き伏せてゴールデンウ

イトクを白浜で静養、西成区のスモッグから逃れて小市民的な喜びに感概を催された。過日実妹を殺して全国を逃げ廻っていた指名手配の兄不倫の恋を清算すべく投身自殺をした三段壁では、句帖の一片を破って、「三段壁悲しきさだめ 妹よ兄よ」の即吟を記し足下の怒濤に散らし、見も知らぬ兄弟の冥福を祈られた。

▼高野不二氏（新潟県）は十四年余動続の佐渡農業高校から兩津高校へ転動された。また十一年余から川柳生活の句帖の千五百余句から二十句抜粋、昭和四十年三月第三句集「あしあと」を発行された。

▼吉田隆史氏（神戸市）は五月十日ひかり号で東京、福島、飯坂温泉、仙台、花巻温泉、浅虫温泉、青森、十和田湖、秋田、温海温泉等東北の温泉地を巡遊二十日過帰神される予定。
▼田垣方大氏（倉敷市）から、「雑誌で先生のご入院を承り驚い

ています。一日も早いご快癒をお祈り致します。昨年三月次女が浪速短大を卒業、今年四月三女が同大学へ入学しましたので一度上阪したく思いながら意の如くなりません」

▼工藤甲吉氏（青森市）は社内人事異動のため、三、四月は忙しい日々を送られたが四月下旬やと平常に戻り始めて句作に励みたく思っておられる。十和田湖へのバスは四月二十九日から開通、桜もこれからです。

▼榎紫光氏（愛媛県）は三月二十六日愛媛県川柳文化連盟の行事の大島青松園（香川県）を慰問の一りに参加、「川柳雑誌」のバックナンバーをお土産に持参して喜ばれ、ライ患者とは思えぬ明るい、顔に迎えられる手元へ目をそらし「えんびつを握る手元へ目をそらし」

▼直原七面山氏（岡山県）は五月十六日今治市で開催された第十一回愛媛川柳研究大会に出席、長野

▼川維備前支部会員の句集「龍泉」(第二集)が昭和四十年五月一日岡山県和気郡吉水町吉水川中川維備前支部から発行された。序文は浜田久米雄氏、あとがきは支部長の横山一声氏が筆を執っている。二十五名の作品十句ずつが掲載されている。非売品。
▼川柳「たけはら」五月号は百号

▼川柳「たけはら」五月号は百号京都分館へ。

記念特集号として昭和四十年五月一日竹原市竹原町田中、竹原川柳会から発行された。
▼「川柳きやり」五月号は創刊四十五周年特集号として昭和四十年五月十日東京都豊島区高田本町二ノ一四五川柳きやり吟社から発行された。

▼金井文秋氏（大阪市）二女朝代さんは五月二日佐々木弘氏と縁談ととの華燭の典を挙げられた。お慶び申し上げます。

▼牟田一哲氏（大阪市）は五月十六日午後六時肝硬変のため死去、年七十三。告別式は五月三十日午後三時から四時まで四天王寺本坊で営まれた。謹悼。
電話開通
▼傍島静馬氏（高槻市）の自宅に電話が開通した。
高槻局⑤八七〇二番 (薫)

不朽洞会から

★常任理事会——常任理事会は五月七日日本社句会終了後、同会場で開催、

一、川維川柳ゆかた会の件

右の諸件につき協議した。出席者、腹乃女史・多久志・栗・好郎・梅里・圭井堂・静馬・白柳・摩太郎の諸氏。

★新会員紹介——五月

▼梅田久雄（加賀市） 正

光郎氏推薦

▼大崎筆架（諫早市） 正

▼島田破竹（諫早市） 正
以上壹眼子氏推薦(多)

29 ページからのつづき

間違いと偶然

松江梅里

私の家の宗教は金光教で阿倍野教会の信者である。毎月八日には数多くの信者の中から毎月交替で霊験談を聞きみかけ会と称するものがある。私は毎月の司会を仰せつかっている。いつも前日にその講演者の自宅訪問をして、話のアウトラインを聞かして貰うことにしている。この五月の例会には、藤本幸治さんという方がされるので、その前夜訪問することにした。宅は環状線桜の宮駅の近所パチンコ屋の横丁と聞いていたが、夜のこともあるし、初めて

のところでもあるので、予め電話帳を調べると都島中の一ノ一五九215818硝子加工とあったのでそれをメモして桜の宮駅で下車した。乗降口を間違えたのか目標のパチンコ屋が見当たらないので通りがかりの高校生に都島中の一ノ一五を尋ねるとそれは僕の家の近くだとのこと、しかもその硝子屋も知っていると言うので同道して貰った。駅の近くだと聞いていたが六百米程歩いたところまでこだと教えて貰った。

シャッターが降りていたが看板に不二屋硝子店とあったので表戸を軽く叩いてみたが応答がないので隣の薬局で尋ねると二階に在られるらしいとのこと、電話を借りて先刻メモした番号にダイヤルを廻すと、藤本さんが出た。来意を告げると閉っていますかすぐにあけますと言われたので、待っていると言われ、シャッターがあいて中学生らしい少年が自転車を出して出て来た。今晩わと声をかけた。阿倍野教会の松江です。お父さんが奥さんらしい人がどうぞお這入り下さい。「主人は今自動車の講習で近くの学校へ行っております。もう帰る頃ですからテレビでも見てお待ちになって下さい」と応接室に招じられコーヒ等よばれ世間話等していた。主人は顔見知りだが奥さんとは初対面そのうちに信心の話になって入神の動機月参拝はしてられますか等と聞く。主人は信心しているが私はしていない。

いとのこと、最近お宅祭をされたこと、最近お宅祭をされたこと、最近お宅祭とはなんのことですかと言う。一寸この辺から話が食い違ってきた。というのはお宅祭とは教会から先生に来て貰ってお祭りをすることを言う。信者なれば誰れでも知っていることなのである。主人は毎月伏見へ参りてますと、ますます話がちぐはぐになって来た。金光さんをコンコンサン(狐)と感違いついたらしく、全然間違った家に上り込んでしまっていることに気がついた。藤本さんと違いますが初めて聞くこと、先刻の電話は山原ですとのこと、先刻の電話はと聞くことそんな電話はかかって来ないとのこと、番号も全然違っている。奥さんが9215818へ掛

けてくれると、やはり藤本さんが出た。曰く先程から表に立って待っていますがお出にならぬのでどうしたことかと言われ、実はかくかくの次第と述べると都島中野町一ノ一五と中通りの間違いだっただことが判った。乗降口を西側へ降りたことがこんな間違いを生じたことになった。山原さんには全くバツの悪いことで、そそくさとおわびもそこそこ引退がろうとするところへ折も折、当の主人が戻って来、全然違う人で見知らぬ私が上り込んでいたので怪げんな顔をされ挨拶もそこそこ消えてしまった。やっとのことで目的の藤本さんのところへ辿りついた一時間余り全くキツネにつままれたような話である。

く 逝 哲 一



一哲・牟田哲三郎医博(不朽洞会員)は五月十六日午後六時、肝

治二十四年十一月十四日、佐賀県小城町で生

一 哲 句 抄

名曲も戦後はジャズに牛耳られ

自宅からぬけ出し歩く夢を持ち

ゴールイン無理がたたった不起の客

すねかじりろくでもないこと思いつき

茶柱を気にする程のよわりよう

新郎は扇の位置を教えられ

悪人の人権だけが認められ

不満顔見せぬ貞女が遂に勝ち

自宅へも時々帰る主人なり

直言で損するあたり親ゆすり

一千万投げ出ししおちん見直され

要人狙撃好奇心では済まされず

黄色でも赤でも走る酔っぱらい

年忌にも顔出し出来ぬ左前

本省の取附証不十分

デパートの品ではねーと云う婦人

お茶漬で育った癖が抜け切れず

母親は合図の咳に気が付かず

臓再発で永眠された。大光院殿仁哲日宗大居士、享年七十四歳、明

閑しても常に研究を怠らず、三階に研究室を設け、権威者を招いて

た。専門医学に午後二時から大阪四天王寺本坊に於いて厳修された。

大萬川柳

兼題「仮病」

入選発表

選者 麻生路郎先生
投句総数 五百十九句
入選 五十三句

加賀 久雄
大坂 弓彦

枕もと薬と酒のある仮病
南河内 吸江

山からのサツの電話に仮病ばれ
大坂 与呂志

二号また勘定づくの仮病もし
富崎 知之助

お見舞に行けば病人出て居らず
守口 静歩

電話口仮病の声をかぎつける
堺 圭井堂

行状の弱味かくしている仮病
大坂 弘生

切角の仮病も雨で順延し
神戸 どんたく

捕虜暮し仮病を使うコッおほえ
倉敷 素身郎

仮病でも使いたいほど医者多忙
宝塚 野菜

仮病とは云わず「イロー」と医師笑う

加賀 光郎
富田林 東雲楼

仮病して債鬼のがれる日を慌て
ややくその仮病半日こらえかね
大坂 良

早退の社を出て仮病すぐ治り
米子 雄々

マダムには仮病のわけがすぐわかり
西宮 多久志

倦怠期頭痛がすると起きてこず
空岡 桃里

無器用な男は仮病を信じられ
泉北 好郎

病欠が逢うてはりますテールム
大坂 梅里

倦怠期仮病でサボル日が続き
大坂 双楽

動続に仮病も入れて五十年
山口 弘道

倦怠期このごろ仮病も堂に入り
山口 弘道

会社からの見舞仮病をあわてさせ
弱い横綱協会が病気にし

見島 恵二朗
何病にしようか届けの墨をすり
熱燗で治る病いと妻は知り
大坂 あいさ

嘘ついた頭痛に留守番させられる
宿酔い妻の気転で風邪にする
大坂 文秋

あまえないだけの仮病と母は知り
愛情をためし仮病を楽しめり
大坂 柳志

嘘をもう見抜いた女医の聴診器
病欠が二人始発へビクを提げ
大坂 小松園

空腹に負けて仮病の意地を捨て
熱があることにしておく電話口
大坂 一栄

腹の虫泣いて仮病の寝ておれず
鄭重に見舞われ仮病こそばゆし
粥炊いて母は仮病へ気をつかい
大坂 阿茶

つとめ先親の仮病で呼びかえし
仮病とも云えず「ミスター」医者は打ち
敷入りの親が仮病で日延べさせ
大坂 晃

兵法の一つ仮病で難を避け
大げさになって仮病がはらはらし
どいつにも今日は会いたくない仮病
高槻 静馬

二日酔風邪で届けて迎い酒
病欠の筈が彼女と歩いてた
神経痛と称し有馬の湯につかり
五客

母さんの仮病父へのストらしく
釣り堀で仮病と法事糸を垂れ
貞操の危機を仮病で娘は逃れ
大坂 柳志

休ませて貰う仮病は咳いて見せ
ゼスチャーのうまい仮病を娘が笑い
人ノ句 岸和田 きさ子

会費高すぎて仮病続出し
このたびは母を病気にして借りる
天ノ句 大坂 文秋

粥ばかり出されて仮病身にこたえ
大万川柳ベストテン(五月現在)

一 梅里 一、二、〇 大坂
二 阿茶 八、五 大坂

三 柳志 七、五 大坂
四 どんたく 七、五 神戸

五 桃里 六、五 空岡
六 好郎 六、〇 泉北

- 七 木魚 六、〇 和歌山
- 八 美房 六、〇 富田林
- 九 文秋 六、〇 大坂
- 一〇 圭井堂 六、〇 堺
- 一一 潮花 六、〇 高槻
- 一二 双楽 五、〇 大坂
- 一三 静馬 四、〇 高槻
- 一四 久雄 四、〇 加賀
- 一五 小松園 三、〇 大坂
- 一六 晃 三、〇 大坂
- 一七 多久志 三、〇 西宮

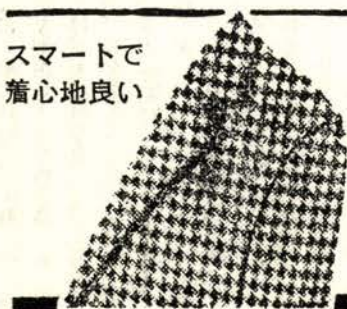
一八 清人 三、〇 布施
一九 雄々 三、〇 米子
二〇 恵二朗 三、〇 見島
(以下 畧)

次ぎの兼題「真っ先き」五句以内

〆切 六月十日
発表 六月二十日

七月の予告「割り込み」
〆切 七月十日
発表 七月二十日

投句先
大阪市阿倍野区松崎町三ノ十
大萬川柳会



GOLDEN O.S.K.の紳士服
各地特約店に有り

スマートで
着心地良い

いのちある句を創れ



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

五月句会 (大阪市)

5月7日 午後6時

会場——千日前 自安寺

新緑の若葉燃える五月の本社句会は、
久々で昔の人の顔も見え、楽しい集い、
これも川柳句筵ならねばの喜びである。
本日の句評は、清水白柳氏が本誌四月号
から、一々、メスを振つての批評、流石
に、慣れたもの、聞くものをうなずかせ
る。これも川柳句会の楽しみの一つ。席
・兼題の披露にドット笑わせるユーモア
の句の激突、考えさせられる句、うまい
なアと思う句には一入耳を傾ける風景、
のち、若本多久志氏から、我等の恩師、
路郎先生を代表して見舞われたご様子
を、詳細報告され等しく一日も早くご全
快をお祈りするのみ。本日の不朽洞杯は
團秀作家のベテラン内藤さき子さんの句
に輝き、カップは女性陣へ、時に午後九
時過。

出席者——腹乃、摩天郎、好郎、八郎、
静馬、静歩、瓢太、白溪子、たつみ、圭
井帝、いさむ、正彦、一栄、双葉、与呂
志、よしを、弓彦、素郎、すすむ、滋雀、
花梢、すみれ、舟遊、柳宏子、市郎、操
子、さき子、武助、清子、美房、梅里、

いわを、薰風、文秋、白柳、稔夫、トメ
子、天樹、吉太郎、狂二、珠笑、柳太、
句楽坊、有子、多久志、清人、阿茶、み
さ子、泉隆、甫佑、金三、栞、あいき、
宏子

兼題「切れ味」 若本多久志 選

切れ味のにぶる我身に砥石なし 句楽坊
切れ味をはめるとわさび鼻に抜け 梅里
秘書を通せば切れ味が鈍くなり 白柳
切れ味のよい文章で解雇状 稔夫
切れ味の利いた人事が社を固め 清子
切れ味は知らず家宝と言う刀 文秋
切れ味の冴えぬ課長で親しまれ 静馬
髻のかずかぞえるような刃の当り 珠笑
切れ味を試めず決まりの紙吹雪 瓢太
切れ味の良さにうなずきも素直なり 吉太郎
お調子に乗って顔まで斬った香具師 圭井堂
キーキーとがむしやにひく鋸の音 柳宏子
切れ味のよい管パトロン出来て 阿茶
切れ味をなめす西瓜へ子等呼び 操子
素人の研ぎ刃光った程切れず 金三
理髪師の切れ味頭の毛でためし 一栄
もつ人がもつ切れ味まで変わり 甫佑
切れすぎる人ですこし不安なり すみれ
指切って研いだ夫がうらまれる 圭井堂
逢いに行く日のジレットがころもじ 文秋
ニューレザー今来た客をなめしぞり 美代
貸し惜しみる皆切れのよい目立 金三
こうすれば切れる鉄に教えられ 滋雀
カミソリと言われた頃もあつて老い 瓢太
切れ味を讃え名月赤城山 梅里
裁断機総毛たつほどよく切れる 謙士
切れにくいほうの鋸貨はしてくれ 静馬
切れ味のよき二、三歩はあはさる 稔夫
兼題「悪女」 川村好郎 選

罪は罪子にはなつかし実の母 八九寸
悪女とは知つてもほどのよきに惚れ 三時
悪女振る女に秘めた過去があり 宗義
土たん場でみせた悪女の土根性 柳宏子
やさしくても悪女にされる二号さん 阿茶
義理立て、今日は悪女になる二号 狂二
振られたら皆んな悪女に見えて来る 吉太郎
ルージュ引く手つき悪女になり切れず 武助
尋問へ悪女の度胸負けていず 白溪子
悪女にもなりませんみんなあな故 美房
倒産へ悪女は拍車かけていた 梅里
傀儡となつて千姫の悪女ぶり 多久志
どたん場で悪女の智恵を借りにくる みさ子
悪女とは見えぬ女因のひとみ澄む 市郎
身を退けば悪女のそしりまぬがはず 梅里
ご近所にどう映らうと僕の妻 珠笑
悪女だと言うてる顔が惚れてる 美房
倦怠期悪女のように妻がみえ すみれ
人情に負けて悪女になりきれず 梅里
大学を出すまで悪女でいたいママ 稔夫
つけまつげ今宵悪女となるかごみ 操子
二号から見れば奥さんこそ悪女 珠笑
捨てられて自嘲の果の悪女ぶり 多久志
悪女にはなれず貞女はあほらしく あいき
悪女でもい、わ今夜も帰えさな 好郎

兼題「けてもの」 吉田圭井堂 選

けてものを食つた野営の長話 八九寸
けてものに積もる埃も付けてくれ 黙平
けてもの好み二号にまで及び どんたく
けてものを集めて父は趣味という 美房
国室もけてもの並みに値踏みされ 梅里
けてものを蒐めて考古学とやら 清人
けてものへたてで食う虫もいてくれ 素郎
物好きがまたけてものにとりつかれ 一栄
けてものを言い値で買わず二年期 弓彦
けてものを掘出しものと自画自讃 梅里
通ぶつてけてもの許り食べあるき 柳宏子
けてもの味の覚えていやがられ 操子
けてものに余生を賭けるコレクショ 梅里
ひねくれて来たかけてもの好きになり 一舟
けてものを器をはめて金を借り 静歩
けてものを遺失係はもてあまし 美房
けてものにもつともちも由緒書 よしを
けてもの正体食べてから教え 白溪子
けてもの趣味で取入る術も知り 柳宏子
けてものような女によろめかれ 静馬
けてものに勿体付けて漢方医 よしを
このほうが情がおすえと手あんどん 句楽坊
けてものをみつけた旅の酒の味 滋雀
けてものをはめて笑顔の選挙前 弓彦
お土産はけてもの一つ飛弾の旅 滋雀
けてものにこつて余生いそがし 稔夫
古物屋と間違えられたコレクショ 狂二
けてもの処置に困つた三代目 阿茶
けてものを撫でておすえとひとり言 花梢

兼題「丘」 橋高薫風 選

童謡に出てくる丘は晴ればかり 梅里
遠足の丘も今では坪五万 圭井堂
丘の上から見ても食しい僕の村 さき子
丘からは一対一のお見送り 八九寸
雪解けの丘越えて来た菓売り 美房
信心と観光丘に立って見る たつみ
思い出の丘分譲地の札が立ち 好郎
若き日を徳が丘なり立ち尽し 圭井堂
売つた丘竹の子だけは抜きに来る トメ子
丘一つ越えりや紋歌の街の色 圭井堂
丘の墓いつの間にやらバス道路 トメ子
丘の旗ダム反対へ疲れ切り みさ子
ブルトーザー填輸の丘をかけるわり 静歩

不安めいたことを言うて易者よはり
 逢うたびに職場突つた名刺出し 好郎
 予備校の案内もあり受験号 滋雀
 抵抗の子へ理由もなき不安 弥生
 春うらら牧場の牛もすわり込み 双葉
 適合期テストしたりしられたり 八郎
 新卒の希望に職場冷たすぎ 宗義
 スポーツカー母の不安がまたまる 綺史郎
 予備校へ行けばよいとなきめる 寿美司
 親馬鹿の夢予備校へ托し切り 野迷路
 独り旅まだまだ遠い駅を聞き 喜仙

川 雑 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

赤旗も袂せ困結も乱れ出し 一舟
 共稼ぎ妻の行儀を叱りかね 金三
 立売りの切符買いたい母を連れ 珠笑
 立売りのおつりハラハラ発車ベル 草々
 千円のつりは馴れてる切符売り 梅志
 腹立ちが行先決めず出してしまい あいき
 思案する余地なし辞表叩きつけ 八郎
 クイズ狂あと一問と思案顔 邦彦
 どうにでもなれと思案が投げ出され 章雅
 休むにも似たる思案で小半日 文秋
 中絶か産むか思案の共稼ぎ 一栄
 家庭裁判所思案に余る顔が寄り 風仙洞
 金のない思案へ無精ヒゲがのび 柳宏子
 思案する煙草の灰が膝へ落ち 清子
 易の灯に思案のつきた顔が付ち 六龍子
 出しやばった発言出鼻へしおられ 半月
 出しやばりは亭主に口を開かせず 野菜
 出しやばりは口だけ身体動かさず 正彦
 出しやばりを一番前に撮るカメラ 三時
 出しやばりの親切だけを受けておき 市郎

川 雑 京都支部句会 (京都市)

田中烏雀報

案が散るしずけさの如来さま 白鳥
 逆光にジェット雲散る恋を得て 枯粒
 癡人のキチンと座る首かなし 司郎
 癡人の歩けばわらび伸びている 豊次
 癡人のよこれた煎章である ゆきら
 歯に衣着せる人の鼻を見ている 磯
 妥協する語尾の含みに胸はずみ 句菜坊
 始玉を含んで領ずいている 亀一
 月と衛星私と母との位置に似る つる子
 衛星の衝突犬が小便している 烏雀

川 雑 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

寄附募集心得たもの二人連れ 雪女
 隠退してもあと追う寄附の高内海
 人間の弱き寄附まで小ぜり合い 暁舟
 寄附帳に書けない愚痴を聞いている 浮葉子
 喜捨と云う武器で寺建ち宮が建ち 泉水
 慈善寄附借金取りのように来る 芥平
 尊さは無名の寄附の筆頭 紅茶
 出しさうな人から寄附帳回される 柳葉
 少額の寄附がオンオンで書き出され 万里歩
 無い袖は振れぬと寄附金断わる気 浅太
 寄附攻めへウィフ聊かノイローゼ あき坊
 貰うより幸いと云う寄附をする 拝山
 寄附高で今日は上座に座はらされ 紅溪
 二人連寄附をこらして居留守をし カロ女
 顔色で寄附高当てる苦勞人 美舟
 出しさうもないのが帳へつけがしら 快夢起
 分に過ぎた寄附金出して見栄をばり エス子
 賛成はするが寄附まとは云はず 魔花麗
 否応を云わせぬ寄附の月賦制 峯園

川 雑 備前支部句会 (岡山県)

横山一声報

寄附金の余分は呑んで村祭 蒼蛇楼
 争った手前で寄附へ気前見せ 三石
 好きなもの食えと卒業日の夕餉 久米雄
 卒業を待つやくりの種がつき 鉛山坊
 卒業の肩に家計がのしかかり 宗義
 卒業をしたらと一人の母が待ち 一声
 卒業に泣き入学に涙ぐみ 正洲
 螢雪の功一枚の紙になり 胡風
 あの方は卒業ですとうす笑い あきら
 卒業式母の大願成就の日 柳風子
 卒業の涙わが家に持ち帰り 知水
 卒業をして片腕になるという 千翁
 卒業の証書が僕を笑ってる 笹舟
 卒業を見送る校舎も花盛り 伊久野
 女手で卒業させた日の仏間 浄美
 おめでたいはずの卒業泣いており 卓久
 からっぽの頭で卒業やと出来 水仙
 梅の花卒業の窓明け放ち 鼓山
 金詰り野菜の鮮度落ちて売れ 謙士
 金詰りしょうじょう料理の日が続き 幸仙
 金詰り桜は知らぬ顔で咲き 静女
 胸くその悪い日靴の土埃り 三六

川 雑 大聖寺支部句会 (石川県)

野村味平報

泥だらけ母が叱れば父がほめ 雅城
 泥の手へ妻はおやつをははらせ 久雄
 泥はねる車へ晴着傘で除け 光郎
 泥中に咲いた白蓮にたとえられ 醉羊
 泥んこになってゲームまだ続け 味平
 御幸でもなければ泥道はつとかれ 政代
 一大事裸をカメラに盗まれた 光郎

川 雑 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

婚禮の間にカツラふんづける 久雄
 新婚の旅で花嫁見失い 雅城
 大事禿頭病にかかったり 醉羊
 電話では言えない娘の一大事 政代
 一大事坊やどこかへ消えている 味平
 激動の十年じつとしわを見る 緑之助
 つらかった十年があり今日あり 好江
 木次町いま十年の花ひらく 李明
 露のとう故郷を出る汽車の煙 水客
 美しい愛犬と会う春の野辺 大鳥
 母の手のこまめに動く大掃除 三雷波
 集団就職故郷の春に見送られ 晃男
 市場籠春の味覚を提げて去に 雄々
 梅散って一直線の春になり 代仕男
 汽車の窓のそばは春が笑ってる 祥月
 姉さんの音痴を流す春の風 英城
 お水取りすめば春の日近うなり 明朗
 十年の基盤ゆるがぬ町づくり 冬樹
 大神楽笛の音春の風に乗る きみえ
 コマーシャル春強引につれてくる 祥吉
 春雷を遠くに聞いて寝るとする 勇
 白バイを止めて見とれる花霞み 正夫
 冬中の体力春へこほれそう 芝子
 満場みな春へ向かっていこうとなし 清夢
 白鳥は宍道湖へ春置いて去に 綾美
 春眠がしきりと襲う講習会 一郎
 天皇を迎える春のあわただし 綾子
 貯金から嫁の座高く評価され 清泉
 子の貯金いつしか家計にくりこまれ 輝水
 へそくりで貯めた貯金はほめられる 澄水
 女教師の手持がぶきたの台所 孝華
 大掃除室のムードを変えてよし 加成

顔色に誠意を見せた。ケルスマン 清風子
免許に恥す交通三悪守る日日 一栄
今日一日元気で無事故誓ひ合い 明朝

川維 宇部支部句会 (宇部市)

安平次弘道 報

流行のメガネ明治に不釣合い 利子
ナンタラスしても美智子妃よく似合ひ いさ夢
老眼に虫メガネ持ち師は達者 博子
見ておれぬうちに借せと子の不器用 一考
見ておれぬ暮しへ ンと出す身銭 南風
見ておれぬ二人に隣は赤くなり 玲子
見ておれぬうだと駒をビシヤリ打ち しげる
ライノの火事へバツで飛んで行き 東村
目をおおう惨事非情に追うカマツ 弘道
見ておれぬ老婆の手を取る交叉点 山峯
ランドセルばかり大きく嬉しい日 かつ子
子沢山嬉しい苦勞がまだ続き 実男
セールスが嬉しい世辞で又買わせ 羊歳
すこうしは嬉しい話もと里の母 粧子
吟行の群れに満開惜しまれる 章雅
満開の散る花びらを受けて呑み 鶏足
満開に浮いても居れぬ資金繰り 百歩
よいとまげ花が散らうと散るまいと きよ子
施設の子へ我が子と同じ愛を向け 六花

川維 土佐支部句会 (高知市)

川竹松風 報

測候所あてにならない雨に濡れ 小雀
独房に眠れぬ窓を叩く雨 呑洋
有難い雨ではあるが今日も雨 吹雪
停年になって変らぬ趣味の友 たかし
後輩が居て停年も又楽し 天花
停年をふと物語る太い指斐 山
停年が近く無口な父になり 勝子

高笑い先入感をくつがえす 大破
共稼ぎ妻の日記は少し貯め 翠川
旗手となるハイト批判も気にとめず 夢生
期待される人間像へ物騰る 紅雨
健康をモットーにして酒を飲み 未遂
少しなら飲んでもよいと医者がおれ 松風

川維 大鉄支部句会 (大阪市)

辻白溪子 報

出展りの過去へ世間がふれたがり たつみ
一口の寄附で済ましておく母校 永断
運動会の母校へむと提げて行き 飛鳥
先輩は母校に触れず飲み仲間 求女
何処で誰に聞いたかクラス会の通知 杜的
仕合せな時がなかったと愚痴 白溪子
目にふれる物をほしがる子に育て 宗悟
水に散るとき桜は生きている 水客

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水 報

割込んだ交通マヒへ救急車 句念坊
交通マヒどうなとせよという構え 局莊
交通マヒイライラするのを後ろにし 宏子
交通マヒ自転車スイスイ横を抜き 和郎
交通マヒ株の値段が変わって居 圭水

諫早川柳会 (諫早市)

川岡靈眼子 報

メートル法母は畳で換算し すがめ
寝たばこで畳こがした夜をしのび 蘇範
古畳かえて祝いの座もはずみ 螢子
新しい畳に替えて嫁を待ち 筆染
脱ぎ捨ててころりとくつろぐ背畳 重幸
一畳で足りる一生横たわり 靈眼子
就職の子に停年は励まされ 万象

就職の馴れぬ仕事に頬を染め 貞女
就職は親から先に調べられ 茶人
躊躇り今日が始めの職に就き 随心
新職場チャホヤされる二、三日 卓二

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太 報

男なんて男なんてと女連れ 花梢
PTA衣裳見せに来たような女連れ 知光
女連れ派手によつてるビヤホール 紅月
結局はすうどんでした女連れ 尚史
宿へ来ても家が気になる女連れ 美房
結論は一切空と悟るべし 笑照
陳情に結論出すなど目で知らし 菊代
結論から云えばアナタは大嫌い 六龍子
結論は可愛い子の為つきかえる 美代
腹の子が結論を出す二人仲 吸江
後悔をするぞと渋々きいてやり 吉太郎
後悔してるところか女浮気する 摩太郎
金づまり独りものにはヒンと来す 八郎
あの人も不渡りを出す金づまり 静林庵
倒産の記事で会社の名を覚え きはち
二号もう聞きあいてる金づまり 好郎
金づまり知らぬ二号のせがみよう 東雲楼

あすなる川柳会 (大阪市)

山本素郎 報

補助椅子も出して初日の幕をあげ 梅里
開幕を待つ間衣裳に目を散らし 百酒
開幕のベル聞きながら席を立ち 万利
裏方のテンヤワンヤで幕が開き よしを
反対はしたが本人委せにし 双葉
反対をされても親の温さ 弓彦
借る見込みも晩酌ちいと過ぎ 尤三
万一の見込みへ母も並ばされ 素郎

城北明老句会 (大阪市)

田中多幸 報

流行を追うひまのない子 沢山 芳
流行の二字を冠して高く売り 一登
背なの子がママに教える流行歌 濁水
流行のショート下から大根足 ひさえ
流行を着ては気分も若返り 多幸
流行を追っても古着捨られず 繁子
流行は春より先にしのびよる 久子
黒羽織買えば白色流行し 源川
流行も時期が過ぎれば安くなり 清次
流行語すかたん云うて笑われる 富士
バス値上げよし桜見は通りぬけ 生仏
パリーから流行風邪の如く来る 弘生
隠し芸の流行歌から年が知れ 同
流行のカガトも一寸低くなり 充弘

宴会・出張パーティ・折詰弁当

梅里ノ店

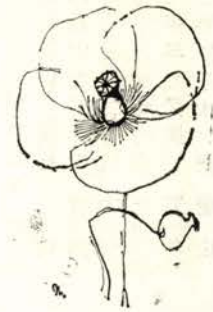
大萬

料亭 阿倍野区松崎町三ノ一〇
TEL(三三)三九三五番

鮎の店 アベノ橋近映地下食通街
TEL(三三)〇一四七番

串の店 南区骨屋町三ツ寺センター
TEL(三三)九一八四番

柳樽室



★極端にあつがりの私はそろそろ冷房が恋しくなつて来た。路郎は四十六日目に退院した。矢張り安静が必要なので、面会謝絶で二階の広いダブルベッドの上で、沈黙考の人となつてゐる。従来じつとしてゐる事の嫌いな路郎にはこれ以上の責め苦はない筈である。然し、どうしても早く治つて、果たさねばならぬ責任が残つてゐるので、頑張つてゐるのだと私は思つてゐる。日に日に、ほんの毛筋程ずつ快方に向かつてゐるので御放念願い度い。

★阿達教授の「江戸川柳と紋章」は前号で終り、「或る扇筒句の系譜」と稿が変わつた。若

本多久志氏の「外来語のあれこれ」は国語が外来語とチャンポンに

験談」も実感だけに迫るものがある、よい読物となつてゐる。
★熊本の田中辰二先生からお見舞の電報を戴く。「ゴゼンカイイノルタツジ」とあつた。路郎は直ぐ返事を出して呉れと言つて次の電文を渡した。「デンカンシヤ一四ヒタイインサラニベツリヨウ

になつた。全国各支部の方々も、振つて出席されたい。万一欠席の場合は投句により会の空気を盛りあげさせて戴きたい。
★高須啞三味氏からお

の活字でさえ眼鏡をかけてもあぶないのだから、校正をする柄でもなし、やがては失明のうきめを見る運命を持つてゐるので、此の上人に厄介をかけまいと大いに自重してゐる。
啞三味氏も親友迷亭氏が他界されたので、その後かたすけで寧日なき日々と御推察申上げ

募るを告見中夏交人柳

川柳雑誌社

- 八月号へ
- あなたの暑中見舞広告を
- ★一口金三百円。幾口でも申し込んでください。
- ★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。
- ★一口分は五分の一段組三行。
- ★原稿締切は七月五日着便。
- ★広告料は前金のごと(郵券代用でもよろしい)

ホウデガンパルチロウ」此の電文は如何にも病床の二人の心状がよく出ている。間もなく奥様の代筆でよこされた先生の

に、「絶安と絶安同志頑張ろう」とあつた。先生も久しく病臥されてゐる。唯々、御恢復を祈るばかりである。
★今年の川柳第二回ゆわかれて興味深い。特

の活字でさえ眼鏡をかけてもあぶないのだから、校正をする柄でもなし、やがては失明のうきめを見る運命を持つてゐるので、此の上人に厄介をかけまいと大いに自重してゐる。
啞三味氏も親友迷亭氏が他界されたので、その後かたすけで寧日なき日々と御推察申上げ

のものの如く、ぶつつかれ精神(交通事故のことではない)を叫ばれてゐます。編集部は努力に努力を重ねております。一層のご支援をお願いいたします。
(宏子)

- ★初夏の太陽が編集局の庭に、サンサンと照り新緑の香をただよわせてゐます。前号「日本晴れの富士に集うて」の大八さんの筆は、同会場に同席しておること感激で、なかなかの好評でした。本号もそれにおとらず大陸独得のものを見せ下さいました。其の他バラエティーに富んだ読物はみなさまの眼をたのしませてくれることと思ひます。
- ★柳歴六十二年の主幹の柳魂は、独自の療養中、ベッドの上から、ナポレオンの指揮そ
- ★川雑支部句会・六月
- ★玉造句会・10日(木)
- 六時半、題、違反・のんびり・古典、所、玉造交又点南百米大阪信用金庫
- ★かがみ句会・2日
- (水)夜、題、迷う・すがる・毛虫・カップ
- (雨具)・一息、所、池田古心居
- ★明和研究句会・13日
- (日)一時、題、風船・
- ★南海電鉄句会・17日
- (木)六時、題、一方通行・片手落ち・物価高
- ★阿倍野句会(信貴生駒回遊吟行)・20日
- (日)午前十時近鉄上六
- ★富田林句会・13日
- (日)一時、題、予約・受売り・大切、所富田
- 林市毛人谷藤岡花桐居



ハンディな生ビール

アサヒ

スタイナー

1本 65円

ご便利な贈りもの

近鉄の商品券

●大阪アベノ・上六両店をはじめ四日市近鉄 和歌山近鉄 別府近鉄 徳山の松下百貨店にもご使用いただけます

●1,000円から10,000円まで各種

●クーポン式の小額商品券もございます(商品券のご用取りはアベノ上六1階)

アベノ・上六

近鉄

木曜定休



第一製薬 東京・日本橋 **マミイン**
 ネバリがきく 《活性体質》をつくる!

活性総合アミノ酸
 ドリンク
 1本100ml瓶入

マミイン

すぐ疲れ、ネバリがきかない—こんな時マミインの14種類のL型活性アミノ酸がイキイキとした体細胞をつくり、強い活性体質がうまれます

川柳 詩川柳考

高鷲亜鈍著

B9型函入

★著者は曾て創生期ごろの超現実主義者であったがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した—今は柳会にあって庶民の詩人的自覚を促す—ここに川柳雑誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る—凡そ前向作家を自負する柳俳人必読の書。

価380円 送費90円

風流 人間横丁

東野大八著

B6型二五八頁

★異常な戦争にまきこまれ隻手となつて帰還した著者のザックバラんな人生批判が、その雄筆からほととびるさまは凄い。まるで腕の冴えた板前の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

価250円 送費70円

橘高薫風子著 麻生路郎序

川柳 句集



価250円 送費60円

▲著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入つて揉まれ、川柳編集部員として精進を続けている前途ある好作家である。

★ご送金は振替口座をご利用が便利で安全です。(切手代用可)

発行所 大阪市住吉局区内 万代西5丁目25 川柳雑誌社 振替口座 大阪 75050 電話 大阪 柳 6081

Printed in Japan

募 集

課題吟募集

- 返 濟 (十句以内) 尼緑之助選
- イメーション (十句以内) 西森花村選
- レ ベ ル (十句以内) 小西雄々選
- 釣 木 銭 (十句以内) 小西無鬼選
- 小 説 (十句以内) 吉田玉井堂選
- 近作柳樽 (雑誌十句以内) 藤甲吉選

- 文 川 方 (雑誌十句以内) 麻生路郎選
- 柳 塔 (雑誌十句以内) 川村好郎選
- 章 (評論・研究・感想其他) 北川春巢選
- 麻生路郎選

投稿規定

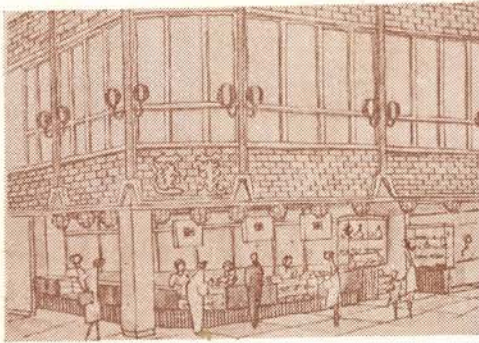
- ▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
- ▼ 「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
- ▼ 「課題吟」「一方帖」は誰でも投句が出来る。
- ▼ 「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行
川柳雑誌 第四十年 第六号
 定価 一一〇円 (送料六円)

(禁転載)
 半力年 七五六円(千共)
 一力年一、四四〇円(千共)
 昭和四十年五月廿五日印刷
 昭和四十年六月一日発行

大阪住吉局区内万代西五丁目二五番地
 編集兼発行 麻生路郎
 行印刷人 麻生幸二郎
 発行所 **川柳雑誌社**
 電話大阪(971)六〇八一
 振替口座大阪七〇五〇番

豚饅・焼売



廣東料理

蓬萊

大阪 なんば

TEL (641) 0551 ~ 2

高島屋店・そごう店・天満京阪ストアー店

疲れをとり
抵抗力の強い
からだをつくる
高単位総合ビタミン・ミネラル剤

ポポン-S



塩野義製薬株式会社

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和四十年六月一日発行 (毎月一日一回発行)

編集兼
発行印刷人

麻生幸二郎 発行所

川柳雑誌社

大阪市住吉区区内万代西五丁目二五番地 電話大阪(67)〇八一

発行所 川柳雑誌社

電話大阪(67)七六〇八一
郵政口座 大阪 七五〇五〇

(毎日新聞評)
麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう六十余年にもなる。この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとした

川柳の味わい方・五百数十句

新川柳鑑賞

麻生路郎著

好評噴々

ものである。

句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

価二五〇円
送費八〇円
B6版
二五〇余頁

大阪市住吉区区内万代西五丁目二五番地
発行所 川柳雑誌社

電話大阪(67)七六〇八一
郵政口座 大阪 七五〇五〇



大和文華館

日本建築の特色に近代美をいかした建物で絵画・彫刻・書蹟・陶磁漆工・染織など 国宝や重要文化財をふくむ逸品を集めた すばらしい美術館です
春秋には 特別展観が開かれます
近鉄上本町から奈良ゆき急行28分
京都から奈良ゆき特急30分 西大寺駅のりかえ5分 学園前駅すぐ